

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

平成28年度

平成29年6月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	-----	1
2	位置	-----	1
3	土壌	-----	1
4	土地面積および利用区分	-----	1
5	機構	-----	2
6	職員	-----	2
7	建物	-----	4
8	新たに設置した主要施設および備品	-----	4
9	決算	-----	5

II 作況

1	気象経過	-----	6
2	当場の作況	-----	9

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	-----	22
	1) 麦類に関する試験	-----	22
	2) 馬鈴しょに関する試験	-----	22
	3) 牧草・飼料作物に関する試験	-----	22
	4) 栽培環境に関する試験	-----	23
	5) 病害虫に関する試験	-----	23
	6) 畑作物および野菜に関する試験	-----	24
	7) 地域支援活動	-----	24
2	技術普及室の活動	-----	25

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表		
	1) 研究論文	-----	27
	2) 口頭発表	-----	28
	3) 専門雑誌記事	-----	30
	4) 著編書・資料	-----	31
	5) 新聞記事	-----	31
2	普及事項		
	1) 普及奨励事項	-----	32
	2) 普及推進事項	-----	32
	3) 指導参考事項	-----	32
	4) 研究参考事項	-----	32
3	品種登録・特許申請	-----	32

V 研究企画・場運営・広報活動

1	諸会議	-----	33
2	各種委員会	-----	33
3	刊行印刷物	-----	37
4	広報活動	-----	37
5	見学受入れ	-----	38

VI 技術指導および研修

1	研修生の受入れ	-----	40
2	講師派遣	-----	40
3	職員研修	-----	41
4	職場研修	-----	42
5	国際交流	-----	42

VII その他

1	技術体系化チーム	-----	43
2	オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	43
3	表彰・受賞	-----	43
4	行事	-----	44
5	自己点検への対応	-----	45
6	建物配置図	-----	46
7	圃場配置図	-----	47

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試元々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫害科を病虫害科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

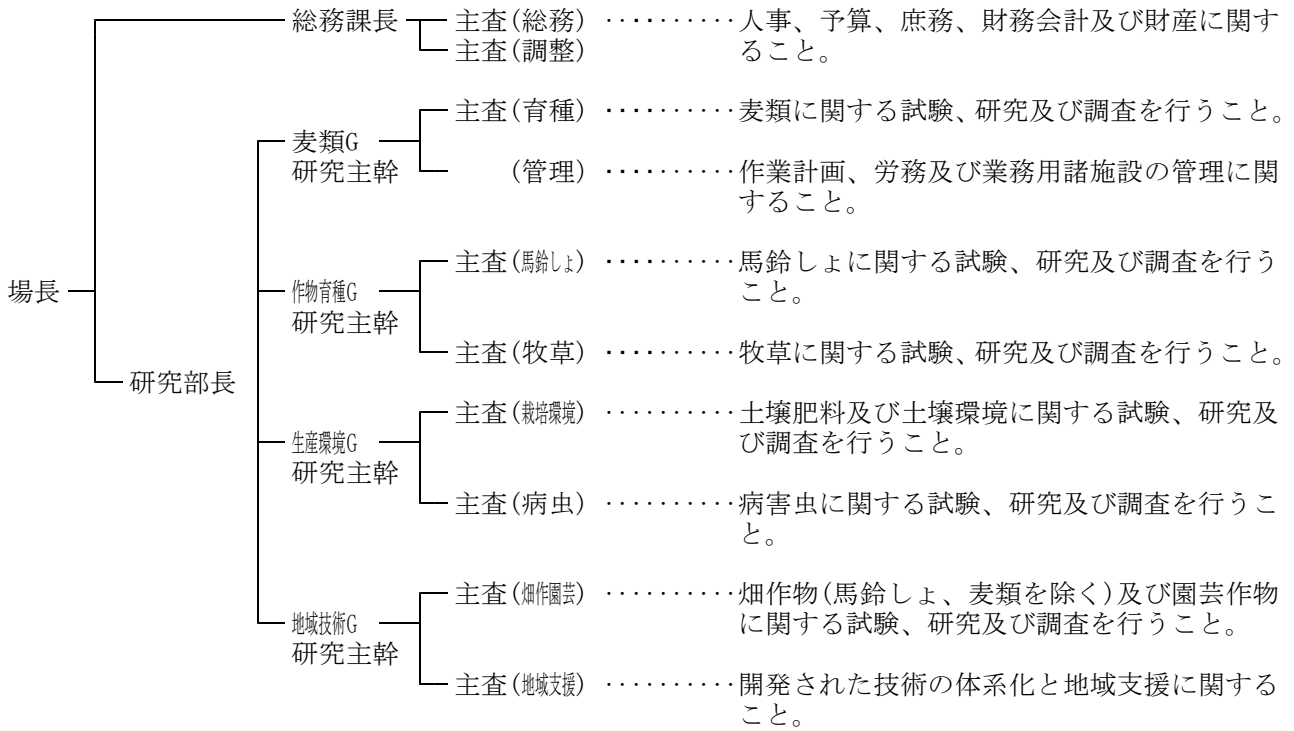
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁舎、建物敷地	118,564
公宅用地	44,151 (道財産)
道路、用排水路	42,383
山林	300,400
試験ほ場(畑)	709,705
" (隔離ほ場)	73,260
原野、その他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)
 上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(地域支援) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

平成29年3月31日現在

グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 G		作 物 育 種 G		生 産 環 境 G		地 域 技 術 G		総務課	合 計	技 術 普 及 室
				育 種	管 理	馬 鈴 しょ	牧 草	栽 培 環 境	病 虫	畑 作 園 芸	地 域 支 援			
研究職	1	1	4	6		4	3	3	4	3	1		30	
行政職					4							6	10	3
計	1	1	4	6	4	4	3	3	4	3	1	6	40	3

(2) 平成29年3月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	法人職員	竹中 秀行	(作物育種G) 主査(牧草)	法人職員	藤井 弘毅
総務課長	北海道職員	山井 雅之	研究主任	〃	足利 和紀
主査(総務)	〃	立山 裕之	研究主任	〃	田中 常喜
主査(調整)	〃	佐々木 賢			
主査	〃	中山 利彦	(生産環境G) 研究主幹	法人職員	中辻 敏朗
〃	法人職員	稲村 浩至	主査(栽培環境)	〃	小野寺 政信
〃	〃	加藤 和憲	研究主査	〃	木場 稔
<研究部> 研究部長	法人職員	島田 尚典	研究主任	〃	唐 星児
(麦類G)	〃	〃	主査(病虫)	〃	小野寺 鶴将
研究主幹	法人職員	浅山 聡	研究主査	〃	池谷 美奈子
主査(育種)	〃	神野 裕信	〃	〃	池田 幸子
研究主任	〃	大西 志全	研究職員	〃	村松 康一
〃	〃	来嶋 正朋			
〃	〃	粕谷 雅志	(地域技術G) 研究主幹	法人職員	田中 静幸
〃	〃	足利 奈奈	主査(地域支援)	〃	奥山 昌誠
研究職員	〃	其田 達也	主査(畑作園芸)	〃	池原 聡裕
主任師	〃	伊藤 幸雄	研究主査	〃	〃
〃	〃	井口 岳秀	研究主任	〃	〃
〃	〃	中出 秀優			
(作物育種G) 研究主幹	法人職員	富田 謙一	(道技術普及室) 上席普及指導員	北海道職員	三宅 俊秀
主査(馬鈴しょ)	〃	大波 正寿	主任普及指導員	〃	山岸 修一
研究主査	〃	松永 浩	主査(地域支援)	〃	千石 由利子
〃	〃	青山 聡			
研究職員	〃	中山 輝			

(3) 転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究部長	島田 尚典	28. 4. 1	十勝農業試験場から
総務課長	山井 雅之	28. 4. 1	道農政部農業経営課から
研究主査	松永 浩	28. 4. 1	十勝農業試験場から
研究職員	村松 康一	28. 4. 1	新規採用
技師	中出 秀信	28. 4. 1	新規採用
(道技術普及室) 主任普及指導員	山岸 修一	28. 4. 1	十勝普及センターから

(4) 転出者および退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究部長	中津 智史	28. 4. 1	十勝農業試験場へ
研究主任	藤田 涼平	28. 4. 1	上川農業試験場へ
場長	竹中 秀行	29. 3. 31	退職
研究職員	中山 輝	29. 3. 31	退職
研究職員	村松 康一	29. 3. 31	退職
(道技術普及室) 主任普及指導員	馬 淵 富美子	28. 4. 1	農業大学校へ

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(m ²)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	現契約職員詰所
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫(馬鈴しょ)	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施 設

該当なし

(2) 備 品

名 称	形 式	金 額 (円)	配 置
大判プリンター	キヤノン iPF780	378,000	総務課
仮設トイレ	日野興業 GX-AKP	275,400	麦類 G
窒素自動分析装置	ビーエルテック QuAAtro390	11,225,520	生産環境 G
デスクトップパソコン (1台)	NEC PC-MK33MLZM15SN	246,240	生産環境 G
畦間サブソイラ	アトム農機 KKSA	420,000	麦類 G
ロータリーモア (自走式)	やまびこ (共立) RM83G	400,194	麦類 G
ノートパソコン (3台)	HP Probook450 G2/CT	320,760	麦類 G
ノートパソコン (1台)	HP Probook450 G2/CT	106,920	生産環境 G
グレンドリル	田端農機具製作所 TDWJS-8GD	1,233,360	麦類 G
流し台	ヤマト科学 TSC-N187	440,640	生産環境 G
原動機付自転車	ホンダ スーパーカブ50	202,670	作物育種 G
人工気象器	日本医科機械製作所 LH-241-S	1,107,000	作物育種 G
純水製造装置	ヤマト科学 WG511	1,102,680	作物育種 G
引き違い書庫	内田洋行 5-860-9205	104,544	生産環境 G
	5-860-9208		
	5-848-2654		
引き違い書庫型薬用保管庫	三商 G-63SG、G-63SS	151,470	生産環境 G
	63B		
ベビーコンベア	光洋機械産業 KL1-35N	415,800	麦類 G
ダンブバケット	北海道菱機販売	490,547	麦類 G

9 決 算 (支出額)

(単位：円)

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	400,000	400,000	0	
重 点 研 究 費	8,006,815	7,841,535	165,280	残額は繰越
職 員 研 究 奨 励 費	856,000	856,000	0	1 課題
経 常 研 究 費	11,897,000	11,897,000	0	
技 術 普 及 指 導 費	303,140	303,140	0	
研 究 用 備 品 整 備 費	12,465,360	12,465,360	0	
維 持 管 理 経 費 (研 究)	725,000	725,000	0	
維 持 管 理 経 費 (一 般)	22,800,000	22,793,598	6,402	
研 究 関 連 維 持 管 理 経 費	505,000	504,247	753	
運 営 経 費	36,240,000	36,161,229	78,771	
共 同 研 究 費	7,000,000	7,000,000	0	
国 庫 受 託 研 究 費	20,490,000	20,486,961	3,039	
道 受 託 研 究 費	9,550,076	9,549,396	680	
そ の 他 受 託 研 究 費	65,631,000	65,617,913	13,087	
施 設 整 備 費 補 助 金	5,022,000	5,022,000	0	
施 設 整 備 費 (繰 越 積 立 金)	3,817,000	3,816,100	900	
科 学 研 究 費 補 助 金	544,217	270,637	273,580	残額は繰越
合 計	206,252,608	205,710,116	542,492	

※ 人件費 (研究職員費・派遣職員費・準職員費・契約職員費) を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬が平年より極めて高く、中旬は平年並で、下旬は低かった。月平均気温は4.3℃で平年並であった(+0.1℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬は多く、下旬は平年並で、月合計は40.5mmで平年よりやや少なかった。日照時間は上旬が平年並で、中旬はやや少なく、下旬は平年並で、月合計は160.8時間で平年並であった。

5月：平均気温は上旬が平年より高く、中旬・下旬はともに極めて高かった。月平均気温は13.3℃で平年より極めて高かった(+3.3℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬・下旬はともにやや少なく、月合計は32.0mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬・下旬はともに多く、月合計は244.2時間で平年より多かった。

6月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬はやや低く、下旬は平年並であった。月平均気温は13.6℃で平年より低かった(-1.7℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬は平年並で、下旬は少なく、月合計は97.5mmで平年よりやや多かった。日照時間は上旬が平年よりやや少なく、中旬・下旬はともに平年並で、月合計は143.0時間で平年並であった。

7月：平均気温は上旬・中旬がともに平年よりやや低く、下旬は平年並であった。月平均気温は18.5℃で平年並であった(-0.4℃)。降水量は上旬が平年よりやや多く、中旬・下旬はともに平年並で、月合計は111.5mmで平年並であった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬は平年並で、下旬はやや多く、月合計は187.7時間で平年よりやや多かった。

8月：平均気温は上旬・中旬がともに平年よりやや高く、下旬は高かった。月平均気温は21.4℃で平年よりやや高かった(+1.2℃)。降水量は上旬が平年並で、中旬・下旬はともに極めて多く、月合計は415.0mmで平年より極めて多かった。日照時間は上旬が平年より多く、中旬はやや多く、下旬はやや少なく、月合計は177.5時間で平年よりやや多かった。

9月：平均気温は上旬が平年並で、中旬は低く、下旬は高かった。月平均気温は21.1℃で平年並であった(+0.4℃)。降水量は上旬が平年より多く、

中旬は少なく、下旬は平年並で、月合計は139.0mmで平年並であった。日照時間は上旬が平年より少なく、中旬・下旬はともに平年並で、月合計は131.3時間で平年並であった。

10月：平均気温は上旬が平年並で、中旬はやや低く、下旬は極めて低かった。月平均気温は6.7℃で平年より低かった(-1.9℃)。降水量は上旬・中旬・下旬がともに平年より少なく、月合計は32.5mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬・下旬はともに平年並で、月合計は173.3時間で平年並であった。

11月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬はやや低かった。中旬までの平均気温は-1.0℃で平年より極めて低かった(-4.3℃)。降水量は上旬が平年より多く、中旬は少なく、中旬までの合計は46.0mmで平年並であった。日照時間は上旬が平年並みで、中旬はやや多く、中旬までの合計は88.1時間で平年並であった。

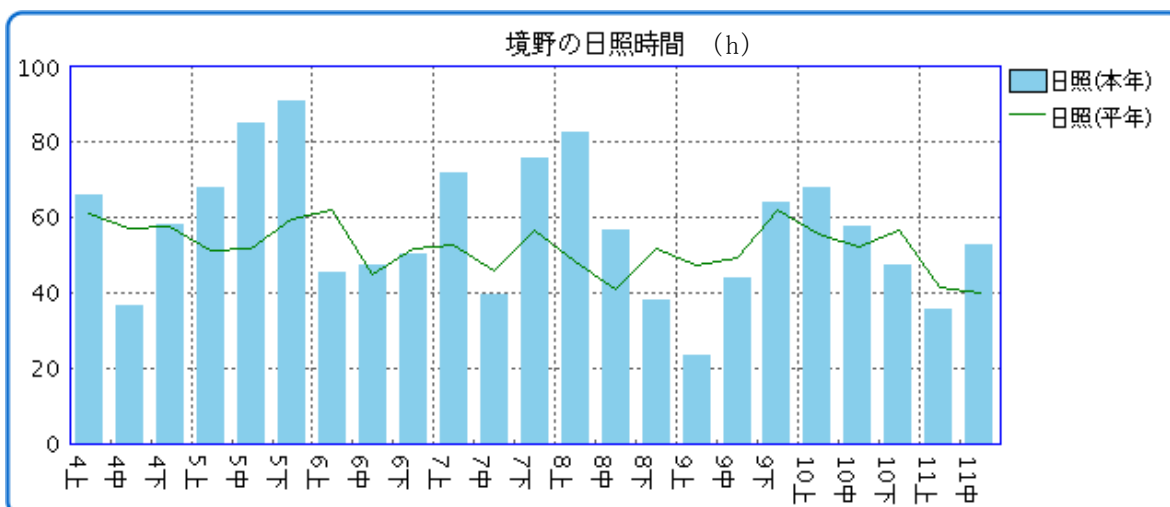
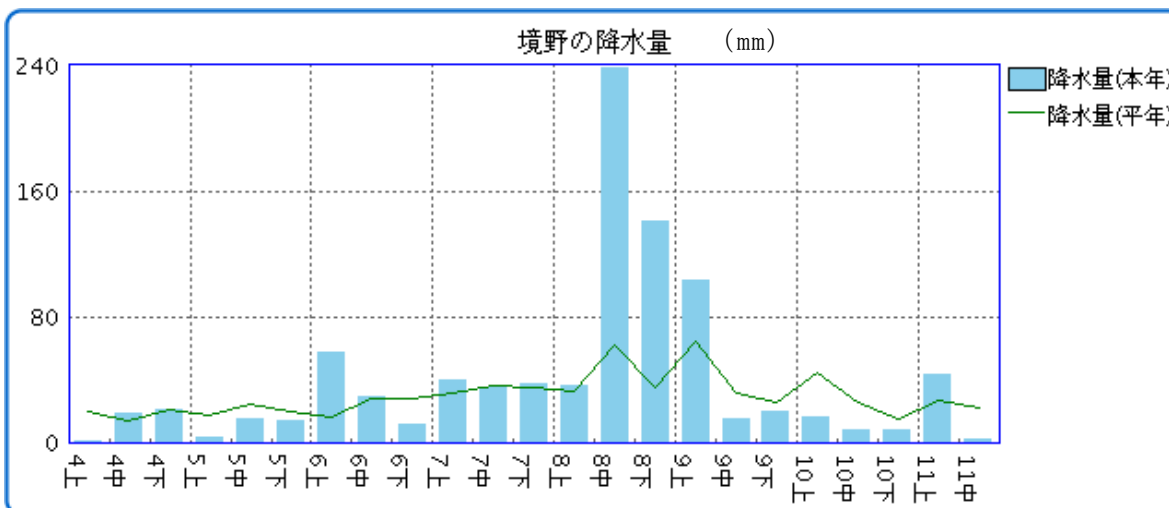
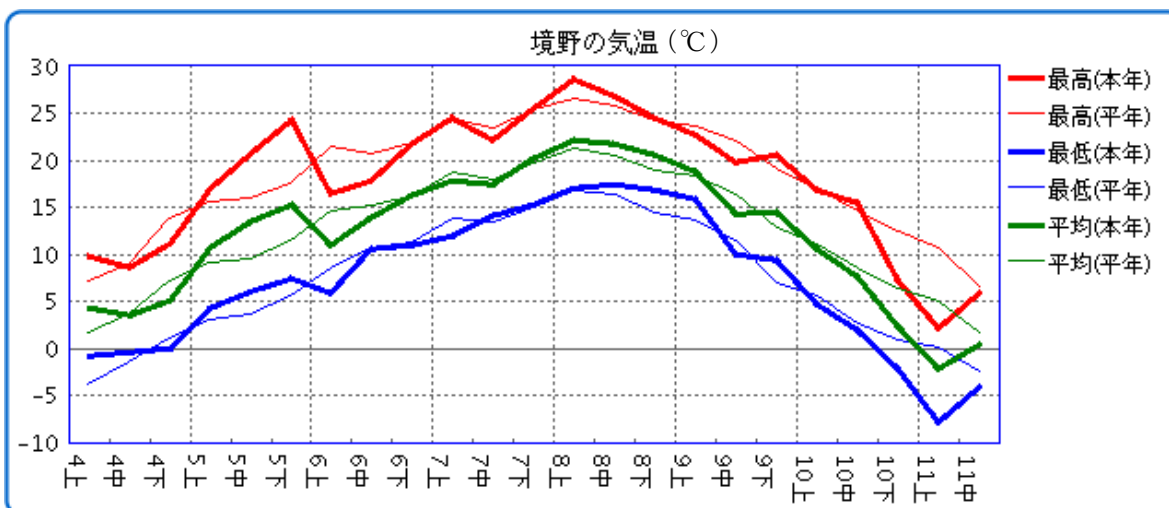
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気 温：5月は平年より極めて高く、6月は低く、7月は平年並で、8月はやや高く、9月は平年並であった。この期間の日平均気温の積算値は2533℃で平年並であった(平年差+77℃、平年比103%)。

降水量：5月は平年より少なく、6月はやや多く、7月は平年並で、8月は極めて多く、9月は平年並であった。この期間の降水量の積算は795mmで平年より多かった(平年差+313mm、平年比165%)。

日照時間：5月は平年より多く、6月は平年並で、7月・8月はともにやや多く、9月は平年並であった。この期間の日照時間の積算は884時間で平年並であった(平年差+109時間、平年比114%)。

(2) 気温、降水量および日照時間の平年との比較



(3) 気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
平成28年 4月	上旬	4.2	1.7	2.5	9.8	7.1	2.7	-0.8	-3.8	3.0	1.0	19.7	-18.7	66.0	60.9	5.1
	中旬	3.5	3.6	-0.1	8.5	9.0	-0.5	-0.5	-1.5	1.0	19.0	13.5	5.5	36.6	57.3	-20.7
	下旬	5.1	7.2	-2.1	11.2	13.9	-2.7	-0.1	1.0	-1.1	20.5	20.4	0.1	58.2	57.8	0.4
5月	上旬	10.8	9.1	1.7	17.0	15.6	1.4	4.3	3.1	1.2	3.5	17.1	-13.6	67.8	51.2	16.6
	中旬	13.5	9.5	4.0	20.7	15.9	4.8	6.1	3.6	2.5	14.5	23.8	-9.3	85.3	51.9	33.4
	下旬	15.3	11.4	3.9	24.2	17.6	6.6	7.5	5.5	2.0	14.0	20.0	-6.0	91.1	59.4	31.7
6月	上旬	10.9	14.7	-3.8	16.5	21.5	-5.0	5.9	8.6	-2.7	57.0	15.4	41.6	45.6	62.1	-16.5
	中旬	13.8	15.2	-1.4	17.8	20.7	-2.9	10.5	10.6	-0.1	29.5	27.8	1.7	47.2	44.8	2.4
	下旬	16.2	16.1	0.1	21.7	21.9	-0.2	10.9	11.2	-0.3	11.0	27.4	-16.4	50.2	51.8	-1.6
7月	上旬	17.7	18.7	-1.0	24.5	24.4	0.1	11.9	13.8	-1.9	40.0	30.6	9.4	72.0	52.5	19.5
	中旬	17.4	18.0	-0.6	22.1	23.4	-1.3	14.1	13.5	0.6	34.5	36.0	-1.5	39.7	45.6	-5.9
	下旬	20.2	19.8	0.4	25.5	25.4	0.1	15.3	15.0	0.3	37.0	34.2	2.8	76.0	56.7	19.3
8月	上旬	22.1	21.2	0.9	28.6	26.6	2.0	17.1	16.8	0.3	36.0	32.7	3.3	82.7	48.1	34.6
	中旬	21.8	20.5	1.3	26.8	25.7	1.1	17.5	16.4	1.1	238.5	62.1	176.4	56.7	40.9	15.8
	下旬	20.5	18.9	1.6	24.5	24.2	0.3	16.9	14.4	2.5	140.5	34.6	105.9	38.1	51.7	-13.6
9月	上旬	18.7	18.4	0.3	22.7	23.7	-1.0	15.9	13.7	2.2	103.5	64.4	39.1	23.5	47.1	-23.6
	中旬	14.3	16.4	-2.1	19.7	22.1	-2.4	9.9	11.4	-1.5	15.5	30.9	-15.4	43.8	49.3	-5.5
	下旬	14.5	12.9	1.6	20.6	19.2	1.4	9.3	7.0	2.3	20.0	24.8	-4.8	64.0	61.9	2.1
10月	上旬	10.6	11.0	-0.4	16.9	16.9	0.0	4.7	5.5	-0.8	16.5	44.4	-27.9	68.0	55.4	12.6
	中旬	7.6	8.5	-0.9	15.4	14.7	0.7	2.0	2.6	-0.6	7.5	25.2	-17.7	57.7	52.3	5.4
	下旬	2.3	6.4	-4.1	7.2	12.5	-5.3	-2.3	0.9	-3.2	8.5	15.0	-6.5	47.6	56.8	-9.2
11月	上旬	-2.3	5.0	-7.3	2.1	10.6	-8.5	-7.9	0.1	-8.0	43.5	25.9	17.6	35.5	41.2	-5.7
	中旬	0.4	1.6	-1.2	5.8	6.5	-0.7	-4.2	-2.4	-1.8	2.5	21.6	-19.1	52.6	40.1	12.5
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
4月		4.3	4.2	0.1	9.8	10.0	-0.2	-0.5	-1.4	0.9	40.5	53.6	-13.1	160.8	176.0	-15.2
5月		13.3	10.0	3.3	20.7	16.4	4.3	6.0	4.1	1.9	32.0	60.9	-28.9	244.2	162.5	81.7
6月		13.6	15.3	-1.7	18.7	21.4	-2.7	9.1	10.1	-1.0	97.5	70.6	26.9	143.0	158.7	-15.7
7月		18.5	18.9	-0.4	24.1	24.4	-0.3	13.8	14.1	-0.3	111.5	100.8	10.7	187.7	154.8	32.9
8月		21.4	20.2	1.2	26.6	25.5	1.1	17.2	15.8	1.4	415.0	129.4	285.6	177.5	140.7	36.8
9月		21.1	20.7	0.4	28.4	28.7	-0.3	15.2	13.5	1.7	139.0	120.1	18.9	131.3	158.3	-27.0
10月		6.7	8.6	-1.9	13.0	14.6	-1.6	1.3	2.9	-1.6	32.5	84.6	-52.1	173.3	164.5	8.8
11月(中旬まで)		-1.0	3.3	-4.3	4.0	8.6	-4.6	-6.1	-1.2	-4.9	46.0	47.5	-1.5	88.1	81.3	6.8

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。10年平均は前10か年の平均値である。

(4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初霜 (年.月.日)	根雪始 (年.月.日)	根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	晩霜 (年.月.日)	初霜 (年.月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年.月.日)
本年	H27.10.14	H27.11.22	H28.4.7	138	H28.4.30	H28.4.25	H28.4.24	H28.10.5	163	H28.10.21
平年	10.12	12.6	4.12	128	5.4	4.29	5.9	10.13	156	11.1
比較	2	-14	-5	10	-4	-4	-15	-8	7	-11

期間	項目	平均気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (hr)
	5月上旬 ～ 9月下旬	本年	2533	795
	平年	2456	482	775
	比較	77	313	109

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。平年値は前10か年の平均値である。

2. 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦（平成27年9月播種）

作況：良

事由：播種は平年より2日遅い9月18日に行った。出芽期は平年並の9月25日であった。越冬前（11月20日）の草丈と茎数は平年より少なかったが、越冬に必要な生育量は確保できていた。根雪始は平年より14日早く11月22日、融雪期は平年より5日早い4月7日で、根雪期間は平年より10日長かった。調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期は9日早い3月29日で、雪腐病の発生は少なかった。

融雪期以降、4月の平均気温は平年並、5月は極めて高く経過し生育は進んだが、6月上旬

の平均気温は極めて低かったため、出穂期は平年より1日早い6月8日であった。6月下旬～7月下旬の平均気温はほぼ平年並に経過したため、成熟期は平年並の7月26日であった。稈長は平年よりやや短く、穂長、穂数は平年並であった。また、倒伏は発生しなかった。登熟期間が平年より1日長く、7月上旬の日照時間が平年よりやや多く経過したことから、子実の充実は良好であった。リットル重、千粒重ともに平年を上回り、子実重は平年比110%と多収で、検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (平成27年月.日)	9.18	9.16	2
出芽期 (平成27年月.日)	9.25	9.25	0
出穂期 (平成28年月.日)	6.8	6.9	△1
成熟期 (平成28年月.日)	7.26	7.26	0
草丈(cm) (平成27年11月20日)	13.4	19.6	△6.2
草丈(cm) (平成28年5月20日)	39.1	38.1	1.0
草丈(cm) (平成28年6月20日)	91.9	92.7	△0.8
茎数(本/m ²) (平成27年11月20日)	1124	1330	△206
茎数(本/m ²) (平成28年5月20日)	1638	1459	179
茎数(本/m ²) (平成28年6月20日)	794	775	19
稈長(cm) (成熟期)	82	86	△4
穂長(cm) (成熟期)	8.7	8.7	0.0
穂数(本/m ²) (成熟期)	756	752	4
子実重(kg/10a)	773	705	68
同上平年比 (%)	110	100	10
リットル重 (g)	814	794	20
千粒重 (g)	42.6	37.4	5.2
品質 (検査等級)	1	2	-

注) 「きたほなみ」の平年値は前7カ年中、平成22年（最凶）、27年（最豊）を除く5カ年の平均値。

2) 秋まき小麦(平成28年9月播種)

作況: 平年並

事由: 播種は平年より2日早い9月15日に行った。出芽期は平年より2日早い9月23日で、出芽は良好であった。出芽後の平均気温はほぼ平年並に経過したが、10月下旬～11月上旬

は平年より極めて低く、生育は停滞した。越冬前の草丈は平年並、茎数は平年を下回ったが、越冬に必要な生育量は確保できている。

以上のことから、目下の作況は「平年並」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (平成28年月.日)	9.15	9.17	△2
出芽期 (平成28年月.日)	9.23	9.25	△2
草丈(cm) (平成28年11月20日)	18.1	18.5	△0.4
茎数(本/m ²) (平成28年11月20日)	1039	1258	△219

注) 「きたほなみ」の平年値は前7カ年中、平成22年(最凶)、27年(最豊)を除く5カ年の平均値。

3) 春まき小麦

作 況：やや良

事 由：調査圃場は融雪剤散布により3月30日に融雪となった。4月上旬の気温は平年より極めて高く圃場の乾燥が進んだことから、播種期は平年より4日早い4月14日であった。4月下旬の平均気温が平年より低く、出芽期は平年より1日早かった。出芽後の5月の平均気温が高かったため生育は進み、5月20日の草丈、茎数は平年を上回った。6月上中旬の平均気温が平年より低く経過したことより生育は緩慢となり、出穂期は平年並から1日遅かった。開花後の7月上旬の降水量は平年よりやや多く、わずかに赤かび病の発生が認められた。

稈長、穂長は平年並であるが、穂数は平年を大きく上回った。7月下旬から降雨により倒伏が発生し始め、8月3日の大雨によって両品種とも倒伏程度は甚となった。成熟期は平年並から1日遅く、登熟期間は平年並であった。穂数が平年を大きく上回ったことから、子実重は平年比106～120%と多収であった。しかし、倒伏の影響で子実は充実不足となり、リットル重と千粒重は平年を大きく下回った。「春よ恋」では発芽粒がわずかに認められたものの、両品種とも検査等級は1等であった。以上のことから、本年の作況は「やや良」である。

調査項目	春よ恋			はるきらり			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月・日)	4.14	4.18	△ 4	4.14	4.18	△ 4	
出芽期 (月・日)	5.2	5.3	△ 1	5.3	5.4	△ 1	
出穂期 (月・日)	6.23	6.22	1	6.21	6.21	0	
成熟期 (月・日)	8.5	8.4	1	8.6	8.6	0	
草丈(cm)	(5月20日)	17.3	14.7	2.6	17.5	14.8	2.7
	(6月20日)	67.1	67.7	△ 0.6	66.3	67.8	△ 1.5
茎数(本/m ²)	(5月20日)	578	408	170	523	396	127
	(6月20日)	956	796	160	1015	788	227
稈長(cm) (7月20日)	98	94	4	91	94	△ 3	
穂長(cm) (7月20日)	8.2	8.1	0.1	7.6	7.3	0.3	
穂数(本/m ²) (7月20日)	806	538	268	840	571	269	
子実重(kg/10a)	579	481	98	522	493	29	
同上平年比 (%)	120	100	20	106	100	6	
リットル重 (g)	789	806	△ 17	772	812	△ 40	
千粒重 (g)	34.3	39.8	△ 5.5	33.7	42.8	△ 9.1	
品質 (検査等級)	1	1	-	1	1	-	

注) 平年値は前7か年中、平成21年(最凶)、27年(最豊)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし (サイレージ用)

作 況：やや不良

事 由：播種期は平年より1日遅い5月17日であったが、5月下旬の気温が高かったため、出芽期は平年より4日早い5月27日であった。出芽後は6月上旬から7月中旬にかけて気温が全般に平年より低温傾向で推移したため、7月20日の草丈は平年を下回った。開花期および抽糸期は、いずれも平年より1日遅かった。抽糸期後は9月上旬にかけて気温が平年並かやや高い傾向であったものの、草丈は平年を下

回って推移し、9月20日の稈長は平年を32cm下回った。本年の収穫期は平年より1日早い9月23日であった。収穫時の子実の熟度は黄熟初期と平年並で、総体の乾物率は平年より低かった。乾物茎葉重および乾物雌穂重は平年よりやや少なく、乾物総重ならびに推定TDN収量は、いずれも平年比93%と平年よりやや少なかった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	チベリウス			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.17	5.16	1	
出芽期 (月.日)	5.27	5.31	△4	
開花期 (月.日)	8. 3	8. 2	1	
抽糸期 (月.日)	8. 2	8. 1	1	
収穫期 (月.日)	9.23	9.24	△1	
収穫時の熟度	黄熟初期	黄熟初期		
草丈 (cm)	(6月20日)	24.2	31.4	△7.2
	(7月20日)	149.3	179.4	△30.1
	(8月20日)	278.1	314.5	△36.4
稈長 (cm)	(9月20日)	247	279	△32
葉数 (枚)	(6月20日)	4.3	4.7	△0.4
	(7月20日)	12.3	12.5	△0.2
	(8月20日)	15.0	14.7	0.3
生総重 (kg/10a)	6703	6571	132	
乾物茎葉重 (kg/10a)	900	953	△53	
乾物雌穂重 (kg/10a)	943	1024	△81	
乾物総重 (kg/10a)	1842	1977	△135	
同上平年比 (%)	93	100	△7	
推定TDN収量 (kg/10a)	1325	1425	△100	
同上平年比 (%)	93	100	△7	
総体の乾物率 (%)	27.5	30.2	△2.7	
乾雌穂重割合 (%)	51.2	51.7	△0.5	
有効雌穂割合 (%)	100.0	99.3	0.7	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年 (最豊)、25年 (最凶) を除く5か年の平均。

2) 推定TDN収量 = 乾物茎葉重 × 0.582 + 乾物雌穂重 × 0.850。

5) 大豆

作況：不良

事由：播種は平年より4日早い5月19日に行った。播種後の気温が高かったため、出芽期は平年より8日早い5月28日であった。6月上～中旬は低温に推移し、生育は遅延した。開花始は平年より4日遅い7月21日であった。7月下旬以降、やや高温傾向で経過したため、8月下旬には主茎長はやや短い、主茎節数、

分枝数、着莢数とも平年並に回復した。8月中旬以降の降雨の影響により多～甚程度の倒伏が発生し、9月中旬には低温となったため登熟は遅れ、成熟期は平年より9日遅い10月2日であった。百粒重は平年を上回ったが、着莢数、一莢内粒数は平年を下回り、子実重は平年比77%と低収であった。品質は平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	ユキホマレ			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.19	5.23	△ 4	
出芽期 (月.日)	5.28	6. 5	△ 8	
開花始 (月.日)	7.21	7.17	4	
成熟期 (月.日)	10. 2	9.23	9	
主茎長 (cm)	(6月20日)	9.8	12.1	△ 2.3
	(7月20日)	45.0	56.7	△11.7
	(8月20日)	69.4	72.1	△ 2.7
	(9月20日)	69.0	73.2	△ 4.2
	(成熟期)	66.0	72.9	△ 6.9
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.2	1.3	△ 1.1
	(7月20日)	7.9	7.7	0.2
主茎節数	(8月20日)	11.0	11.3	△ 0.3
	(9月20日)	10.3	11.3	△ 1.0
	(成熟期)	10.7	11.2	△ 0.5
分枝数 (本/株)	(7月20日)	5.1	5.7	△ 0.6
	(8月20日)	6.1	5.7	0.4
	(9月20日)	5.2	5.5	△ 0.3
	(成熟期)	5.2	5.3	△ 0.1
着莢数 (個/株)	(8月20日)	78.4	78.2	0.2
	(9月20日)	66.1	68.6	△ 2.5
	(成熟期)	61.1	69.3	△ 8.2
一莢内粒数	1.76	1.87	△0.11	
子実重 (kg/10a)	291	376	△ 85	
同上平年比 (%)	77	100	△ 23	
百粒重 (g)	37.9	36.2	1.7	
屑粒率 (%)	1.4	0.9	0.5	
品質 (検査等級)	2上	2上	—	

注1) 平年値は、前7か年中21年(最凶)、平成23年(最豊)を除く5か年の平均。

注2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

注3) 検査等級は造りによる検査である。

6) 小豆

作況：不良

事由：播種は平年より4日早い5月19日に行った。播種後の気温が高かったため、出芽期は平年より7～8日早かった。6月上～中旬は低温に推移し、生育は遅延した。開花始は平年より「サホロシヨウズ」で5日遅い7月26日、「エリモシヨウズ」では3日遅い7月27日であった。9月上旬の日照不足と9月中旬の低温により登熟は遅れ、成熟期は平年より「サホ

ロシヨウズ」で9日遅い9月26日、「エリモシヨウズ」で6日遅い9月29日であった。両品種とも着莢数、一莢内粒数および百粒重は平年を下回り、子実重は「サホロシヨウズ」が平年比64%、「エリモシヨウズ」が同67%とかなりの低収であった。品質は「サホロシヨウズ」で平年並、「エリモシヨウズ」では平年をやや上回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	サホロシヨウズ			エリモシヨウズ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.19	5.23	△ 4	5.19	5.23	△ 4	
出芽期 (月.日)	5.31	6. 7	△ 7	5.31	6. 8	△ 8	
開花始 (月.日)	7.26	7.21	5	7.27	7.24	3	
成熟期 (月.日)	9.26	9.17	9	9.29	9.23	6	
主茎長 (cm)	(6月20日)	3.3	4.1	△ 0.8	3.3	4.3	△ 1.0
	(7月20日)	12.8	23.3	△10.5	14.2	21.3	△ 7.1
	(8月20日)	72.1	79.3	△ 7.2	70.6	70.9	△ 0.3
	(9月20日)	78.2	86.8	△ 8.6	80.2	75.3	4.9
	(成熟期)	74.4	88.6	△14.2	77.1	75.3	1.8
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.2	0.8	△ 0.6	0.2	0.8	△ 0.6
	(7月20日)	5.9	7.0	△ 1.1	6.4	7.1	△ 0.7
主茎節数	(8月20日)	13.5	13.1	△ 1.1	14.4	13.6	0.8
	(9月20日)	13.1	13.8	△ 0.7	14.3	14.3	0.0
	(成熟期)	13.4	13.9	△ 0.5	14.6	14.3	0.3
分枝数 (本/株)	(7月20日)	0.7	3.1	△ 2.4	1.0	3.0	△ 2.0
	(8月20日)	3.4	4.5	△ 1.1	3.7	4.2	△ 0.5
	(9月20日)	3.2	4.3	△ 1.1	3.9	4.0	△ 0.1
	(成熟期)	2.4	4.2	△ 1.8	3.2	4.0	△ 0.8
着莢数 (個/株)	(8月20日)	43.1	55.7	△12.6	42.0	59.0	△17.0
	(9月20日)	53.2	56.8	△ 3.6	56.7	57.4	△ 0.7
	(成熟期)	48.8	56.7	△ 7.9	51.6	57.4	△ 5.8
一莢内粒数	5.40	5.85	△0.45	6.04	6.40	△0.36	
子実重 (kg/10a)	260	405	△ 145	281	422	△ 141	
同上平年比 (%)	64	100	△ 36	67	100	△ 33	
百粒重 (g)	14.9	15.5	△ 0.6	14.4	14.6	△ 0.2	
屑粒率 (%)	7.6	2.0	5.6	9.8	2.5	7.3	
品質 (検査等級)	3下	3下	—	3中	3下	—	

注1) 平年値は、前7か年中平成23年(最豊)、平成24年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

注3) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

7) 菜豆

作況：不良

事由：播種は平年より4日早い5月19日に行った。播種後の気温が高かったため、出芽期は平年より7日早い5月30日であった。6月上旬～中旬は低温に推移し生育は遅延したが、6月下旬は平年並で推移したため生育は回復し、開花始は平年より1日遅い7月9日であった。8月以降、降雨の影響で倒伏が生じ、登熟に影響した。

成熟期は平年並の9月1日であった。一莢内粒数は平年並であったが、着莢数と百粒重は平年を下回り、子実重は平年比79%と低収であった。また、成熟期前後の高温と多雨により腐敗粒と色流れ粒が多発し、さらに莢内発芽粒も発生したため、屑粒率は平年より著しく高く、品質は平年より劣った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	大正金時			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.19	5.23	△ 4	
出芽期 (月.日)	5.30	6.6	△ 7	
開花始 (月.日)	7.9	7.8	1	
成熟期 (月.日)	9.1	9.1	0	
草丈 (cm)	(6月20日)	11.0	10.1	0.9
	(7月20日)	44.3	45.9	△ 1.6
	(8月20日)	49.5	51.0	△ 1.5
	(9月20日)	45.1	50.8	△ 5.7
	(成熟期)	45.1	50.8	△ 5.7
本葉数(枚)	(6月20日)	0.4	1.0	△ 0.6
	(7月20日)	3.4	3.3	0.1
主茎節数	(8月20日)	5.7	5.3	0.4
	(9月20日)	5.6	5.3	0.3
	(成熟期)	5.6	5.3	0.3
分枝数(本/株)	(7月20日)	4.5	5.4	△ 0.9
	(8月20日)	4.1	5.3	△ 1.2
	(9月20日)	3.9	4.9	△ 1.0
	(成熟期)	3.9	4.9	△ 1.0
着莢数(個/株)	(8月20日)	19.3	21.8	△ 2.5
	(9月20日)	18.1	20.8	△ 2.7
	(成熟期)	18.1	20.8	△ 2.7
一莢内粒数	3.05	3.02	0.03	
子実重(kg/10a)	271	343	△ 72	
同上平年比 (%)	79	100	△ 21	
百粒重 (g)	62.3	71.1	△ 8.8	
屑粒率 (%)	72.1	7.4	64.7	
品質 (検査等級)	規格外	3中	—	

注1) 平年値は、前7か年中、平成23年(最豊)、平成25年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

注3) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

8) ばれいしょ

作 況：やや不良

事 由：植え付けは平年より2日早い5月10日に行った。5月中～下旬の気温が平年より高かったため、萌芽期は平年より4～5日早かったが、6月上～中旬が低温に経過したことから開花始はほぼ平年並であった。枯ちよう期は、8月の気温が平年より高かったため「男爵薯」で平年より6日早かった。「コナフブキ」では2日早かった。

「男爵薯」では、上いも数は少なかったが上いも平均重が重かったため、上いも重は平年比101%と平年並で、でん粉価は平年より0.8ポイント低かった。「コナフブキ」では、8月下旬以降、日照時間が少なく経過したため上いも重は平年比95%と平年をやや下回り、でん粉価も0.6ポイント下回った。このため、でん粉重は平年比92%であった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	男爵薯			コナフブキ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
植付期 (月.日)	5.10	5.12	△ 2	5.10	5.12	△ 2	
萌芽期 (月.日)	5.29	6. 3	△ 5	5.31	6. 4	△ 4	
開花始 (月.日)	6.29	6.30	△ 1	6.29	6.30	△ 1	
枯ちよう期 (月.日)	8.26	9. 1	△ 6	10. 2	10. 4	△ 2	
茎長(cm)	(6月20日)	23.2	20.5	2.7	20.7	22.7	△2.0
	(7月20日)	53	50	3	74	70	4
	(8月20日)	53	50	3	83	79	4
茎数(本/株)	(6月20日)	3.9	3.5	0.4	3.1	3.1	0.0
	(7月20日)	4.1	3.8	0.3	3.0	3.6	△0.6
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	5074	4466	608	3675	3732	△57
	(9月20日)	—	—	—	4157	4900	△743
でん粉価(%)	(8月20日)	14.7	15.2	△0.5	20.7	20.9	△0.2
	(9月20日)	—	—	—	22.5	22.0	0.5
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	—	—	—	894	927	△33
上いも数(個/株)	9.9	11.0	△1.1	9.6	10.8	△1.2	
上いも平均重(g)	105	94	11	111	105	6	
上いも重(kg/10a)	4583	4543	40	4747	4992	△245	
同上平年比(%)	101	100	1	95	100	△ 5	
でん粉価(%)	14.0	14.8	△0.8	21.3	21.9	△0.6	
でん粉重(kg/10a)	—	—	—	964	1046	△82	
同上平年比(%)	—	—	—	92	100	△ 8	

注) 平年値は前7か年中、平成22年(最凶)、24(最豊)を除く5か年の平均。

9) てんさい

作 況：不良

事 由：播種は、平年より2日遅い3月23日に行った。育苗期間中は気温が平年より高めに推移したため、苗の生育は平年より旺盛であった。

移植は平年並の5月6日に行った。4月中下旬に平年並の降雨があり、以降も断続的に降雨があったため活着は順調であった。5月は平均気温が平年より高く日照時間もやや長かったため、生育は平年より進んだ。なお5月8日に10m以上の強風があったが、被害は軽微であった。6月上中旬は気温が平年よりかなり低く、生育は停滞した。6月下旬から7月中旬までは平年並の気象経過となったため、生育は平年並に回復

した。7月下旬から8月中旬までは気温が平年よりやや高く、降水量および日照時間も十分であったため、地上部の生育は順調に進んだが、地下部の生育はやや遅れた。8月中旬から9月上旬の台風による豪雨の影響で、黒根病等の根腐症状が多発した。

収穫は平年より1日早い10月19日に行った。根重は6月の低温の影響と根腐症状の多発のため、平年を下回った。根中糖分は8月中旬から9月下旬までの最低気温が高かったため、平年を下回った。これらの結果、糖量は平年を下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

表 その1

調査項目	移植						直播			
	モノホマレ			アーベント			リッカ (参考)			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3.23	3.21	2	3.23	3.21	2	5.6	5.5	1	
移植期 (月.日)	5.6	5.6	0	5.6	5.6	0	-	-	-	
出芽期 (月.日)	-	-	-	-	-	-	5.17	5.18	△1	
収穫期 (月.日)	10.19	10.20	△1	10.19	10.20	△1	10.19	10.19	0	
草丈 (cm)	(5月20日)	7.1	4.9	2.2	6.5	5.1	1.4	-	-	-
	(6月20日)	24.1	26.9	△2.8	24.0	27.0	△3.0	8.8	14.8	△6.0
	(7月20日)	56.5	55.3	1.2	52.5	51.8	0.7	43.4	51.5	△8.1
	(8月20日)	62.9	60.2	2.7	60.3	55.9	4.4	64.5	62.4	2.1
	(9月20日)	63.4	60.0	3.4	58.9	56.0	2.9	66.0	62.2	3.8
生葉数 (枚)	(5月20日)	6.1	4.8	1.3	5.7	4.4	1.3	-	-	-
	(6月20日)	12.6	12.6	0.0	12.3	11.7	0.6	6.2	7.2	△1.0
	(7月20日)	21.3	21.9	△0.6	20.7	20.7	0.0	13.9	16.2	△2.3
	(8月20日)	28.2	27.5	0.7	29.2	27.0	2.2	18.7	21.7	△3.0
	(9月20日)	32.4	30.4	2.0	31.4	29.6	1.8	20.6	21.3	△0.7
茎葉重 (g/個体)	(6月20日)	75	111	△36	73	104	△31	4	17	△14
	(7月20日)	648	616	32	630	587	43	265	447	△182
	(8月20日)	891	832	59	982	855	127	717	793	△76
	(9月20日)	744	747	△3	771	779	△8	620	720	△100
根重 (g/個体)	(6月20日)	15	23	△8	16	23	△7	0	1	△1
	(7月20日)	249	269	△20	261	282	△21	56	149	△93
	(8月20日)	678	720	△42	736	789	△53	455	588	△133
	(9月20日)	1001	1017	△16	1264	1030	234	802	908	△106
根周 (cm)	(7月20日)	20.5	21.6	△1.1	21.8	22.9	△1.1	15.8	19.0	△3.2
	(8月20日)	29.1	30.8	△1.7	32.0	33.1	△1.1	24.9	29.8	△4.9
	(9月20日)	34.0	35.2	△1.2	33.8	36.7	△2.9	30.7	33.6	△2.9
根中糖分 (%)	(9月20日)	14.43	14.83	△0.40	15.04	15.14	△0.10	14.63	14.65	△0.02

表 その2

調査項目	移植						直播		
	モノホマレ			アーベント			リッカ (参考)		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
茎葉重 (kg/10a) (収穫期)	4110	4780	△670	4980	5223	△243	3666	4313	△647
根重 (kg/10a) (収穫期)	6720	7329	△609	6890	7437	△547	5600	6628	△1028
同上平年比(%)	92	100	△8	93	100	△7	84	100	△16
根中糖分(%)	16.59	17.17	△0.58	17.19	17.66	△0.47	16.39	17.39	△1.00
同上平年比(%)	97	100	△3	97	100	△3	94	100	△6
糖量(kg/10a)	1115	1258	△143	1184	1313	△129	947	1153	△206
同上平年比(%)	89	100	△11	90	100	△10	82	100	△18

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、22年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 直播「リッカ」は参考品種、平年値は前6か年の平均。

10) 牧草(チモシー)

作況: 平年並

事由: 萌芽期は平年より3日早い4月21日であった。冬損程度は平年並、春の被度は100%であった。

1番草; 5月の気温が平年より高く推移したため、1番草の出穂始、出穂期はいずれも平年より4日早く、刈取りは平年より4日早い6月17日に行った。草丈は平年より8cm低かったが、乾物収量は平年比102%と平年並であった。

2番草; 収穫時の草丈は平年並であったが、

節間伸長程度は平年よりやや大きかった。乾物収量は平年比111%と平年より多かった。

3番草; 8月中旬から9月上旬の降水量が平年より極めて多かったため、乾物率は平年を大きく下回った。このため、生草収量は平年より多かったが、乾物収量は平年比94%とやや少なかった。

1~3番草の合計乾物収量は、平年比102%と平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表 その1

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
萌芽期	(月.日)	4.21	4.24	△3
冬損程度		1.0	1.2	△0.2
被度(%)	(5月18日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始	(月.日)	6.10	6.14	△4
出穂期	(月.日)	6.14	6.18	△4
出穂程度	1番草	8.0	7.5	0.5
節間伸長程度	2番草	3.3	2.8	0.5
刈取日(月.日)	1番草	6.17	6.21	△4
	2番草	8.5	8.11	△6
	3番草	9.29	10.5	△6
倒伏程度	1番草	4.5	3.0	1.5

表 その2

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
病害罹病程度	1番草	1.0	1.7	△0.7
	2番草	3.0	3.3	△0.3
	3番草	2.0	3.5	△1.5
草丈(cm)	(5月18日)	37	30	7
	(6月5日)	66	69	△3
	1番草	94	102	△8
	2番草再生時	39	37	2
	2番草	58	58	0
	3番草再生時	45	45	0
	3番草	48	45	3
生草収量 (kg/10a)	1番草	3126	2734	392
	2番草	807	792	15
	3番草	945	623	322
	合計	4878	4149	729
乾物率(%)	1番草	19.0	21.7	△2.7
	2番草	23.5	22.5	1.0
	3番草	18.0	29.9	△11.9
乾物収量 (kg/10a)	1番草	594	580	14
	同上平年比(%)	102	100	2
	2番草	189	170	19
	同上平年比(%)	111	100	11
	3番草	170	181	△11
	同上平年比(%)	94	100	△6
	合計	953	931	22
同上平年比(%)	102	100	2	

注1) 平年値は前7か年中、平成24年(最豊)、平成27年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 冬損程度は1:無または微~9:甚。出穂程度および節間伸長程度は、1:無~9:極多。倒伏程度および病害罹病程度は、1:無または微~9:甚。病害は主に斑点病。

11) たまねぎ

作 況：やや良

事 由：晩生品種「スーパー北もみじ」の播種は、平年並の3月11日に行った。育苗期間中の気温は、4月下旬が低かったものの、おしなべて平年並から高めに推移し、苗の生育は順調であった。移植は平年より1日早い5月11日に行った。移植後から5月下旬まで、気温は高く、降水量は少なく推移したことから、生育は停滞した。6月上中旬の気温は低く、適度な降雨もあったことから、生育は徐々に回復し、6月20日における草丈、生葉数および葉鞘径はいずれも平年並であった。その後7月上旬の降水量はやや多く、日照時間もやや多かったため、

葉部生育は進み、7月20日における草丈および葉鞘径は平年をやや上回り、生葉数は平年並であった。一方、球肥大はやや遅れ気味であったが、8月上旬までの気温および降水量は概ね平年並に推移し、日照時間がやや多かったことから、8月20日における一球重は平年を大きく上回った。8月中旬以降の多雨により、根切り作業は遅れた。平均一球重は平年を大きく上回り、肌腐れ等の腐敗がやや多かったものの、総収量は平年を上回った。変形球がやや多く規格内率はやや低かったものの、規格内収量は平年をやや上回った。

以上のことから、今年の作況は「やや良」である。

調査項目		スーパー北もみじ			オホーツク 222(参考)			北もみじ 2000(参考)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	3.11	3.11	0	2.26	3.1	△4	3.11	3.11	0
出芽期	(月.日)	3.23	3.23	0	3.12	3.15	△3	3.23	3.23	0
移植期	(月.日)	5.11	5.12	△1	4.28	5.6	△8	5.11	5.13	△2
球肥大期	(月.日)	7.25	7.22	3	7.12	7.10	2	7.25	7.18	7
倒伏期	(月.日)	8.10	8.8	2	7.31	7.30	1	8.10	8.4	6
根切日	(月.日)	9.1	8.25	7	8.10	8.12	△2	9.1	8.21	11
枯葉期	(月.日)	8.28	8.30	△2	8.19	8.19	0	8.27	8.25	2
収穫期	(月.日)	9.7	9.10	△3	8.29	8.29	0	9.7	9.8	△1
草丈(cm)	移植時	22.1	21.8	0.3	26.5	23.9	2.6	19.9	22.2	△2.3
	(6月20日)	31.8	31.5	0.3	47.1	45.3	1.8	33.3	36.8	△3.5
	(7月20日)	91.4	82.8	8.6	92.1	83.6	8.5	88.4	81.4	7.0
生葉数(枚)	移植時	3.3	3.2	0.1	2.8	2.9	△0.1	3.1	3.0	0.1
	(6月20日)	5.7	5.8	△0.1	6.8	6.4	0.4	5.4	5.6	△0.2
	(7月20日)	10.5	10.0	0.5	10.6	9.5	1.1	10.0	9.4	0.6
葉鞘径(mm)	移植時	4.1	3.9	0.2	4.2	3.9	0.3	3.8	3.7	0.1
	(6月20日)	8.7	8.7	0.0	12.8	11.7	1.1	9.2	9.5	△0.3
	(7月20日)	22.1	21.0	1.1	23.7	21.9	1.8	22.7	21.1	1.6
葉身生重(g)	(7月20日)	180.2	139.8	40.4	215.8	145.6	70.2	169.3	125.2	44.1
球生重(g)	(7月20日)	56.2	67.4	△11.2	110.7	97.8	12.9	54.5	64.2	△9.7
	(8月20日)	296.2	219.7	76.5	321.6	255.5	66.1	339.9	219.3	120.6
総収量(kg/10a)		7483	6277	1206	8694	7310	1384	8257	6538	1719
規格内収量(kg/10a)		6451	5606	845	7429	6508	921	7138	6089	1049
同上平年比(%)		115	100	15	114	100	14	117	100	17
規格内率(%)		86	89	△3	85	89	△4	86	93	△7
平均一球重(g)		277	218	59	303	239	64	291	211	80

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、25年(最凶)を除く5か年の平均。但し、参考品種は前6か年平均。

付表1 各作物の耕種概要

作物名	一区面積 (m ²)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/m ²)	播種量 (kg/10a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	7.2	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	255	-	-
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	340	-	-
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	-	-	7,491
4. 大豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
5. 小豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
6. 菜豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	-	-	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生えん麦	60.0	23.8	1	-	-	7,003
9. 牧草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	-	-	2.0	-
10. たまねぎ	10.0	2	たまねぎ	30.0	10.5	1	-	-	31,750

付表2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量 (kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	6.0	20.0	9.7	3.8	3,000	起生期追肥 N: 3.0	H27年より変更
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0		炭カル:150	
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0			
4. 大豆	1.8	15.0	7.8	3.0			
5. 小豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
6. 菜豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0			
8. てんさい	14.9	29.9	12.3	6.7			
9. 牧草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	2.3			
10. たまねぎ	15.0	30.0	9.0	4.5			

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

1) 麦類に関する試験

麦類グループ（育種）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験および除草剤などの資材試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業（課題番号26097C）」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。

「奨励品種決定調査」では秋まき小麦の「北見92号」、「北見93号」、春まき小麦では「北見春78号」および「北見春79号」を供試し、4系統とも試験継続とした。秋まき小麦「北見94号」、「北見95号」および春まき小麦「北見春80号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW7号」など6系統について適応性を検討した。

二条大麦では、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業 実用技術開発ステージ（育種）（課題番号28038C）」により適応性検定試験を行い、「札育5号」の農業特性は概ね対照品種並であるが赤かび病抵抗性がやや劣ることを明らかにした。

2) ばれいしょに関する試験

作物育種グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成並びに栽培試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は「実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」、「馬鈴しょ品種開発事業」、「でん粉原料用馬鈴しょにおける多収品種の開発強化」の各試験研究課題により、安定多収な品種の育成を進めている。本年度より新たに2課題を開始し、「北海道畑作で新たに発生が認められた難防除病害虫ジャガイモシロシストセンチュウおよびビート西部萎黄ウイルスに対する抵抗性品種育成のための先導的技術開発」ではジャガイモシロ

シストセンチュウ抵抗性品種の育成、ホクレンとの共同研究課題「「トヨシロ」置き換えの加工用馬鈴しょ品種の育成促進」では加工用品種育成の強化に取り組んでいる。品質の向上については「でん粉原料用馬鈴しょにおける低離水率・低リン系統の開発強化」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の開発強化」により、でん粉品質並びにチップ加工適性の優れた品種の開発促進を行っている。耐病虫性の向上については「DNAマーカーによる馬鈴しょ耐病虫性品種の開発強化」、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発強化」、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発強化」の各試験研究課題により、耐病虫性（ジャガイモシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病）に優れた品種の開発促進を進めている。

「奨励品種決定調査」では、加工用「北育22号」、でん粉原料用「北育23号」「北育25号」および業務用「北育24号」について検討し、「北育22号」「北育24号」を継続検討とした。

「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成2系統について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行い、加工用の「CP08（ゆきふたば）」が北海道優良品種に認定された。

栽培法に関する試験では「馬鈴しょ「北育20号」の安定多収栽培法確立と現地実証」では、場内圃場および現地圃場において、「コナユタカ」の安定多収栽培のための施肥法、機械収穫適性等について検討を行い、「ばれいしょ「コナユタカ」の安定生産技術」として成果を取りまとめた。

3) 牧草・飼料作物に関する試験

作物育種グループ（牧草）では、チモシー新品種育成試験、牧草・飼料作物の系統評価、品種比較試験、栽培試験ならびに除草剤などの資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業、北海道草地の植生を改善し高品質粗飼料生産を可能とする牧草品

種の育成」では、極早生の有望系統「北見32号」、「北見33号」の地域適応性検定試験及び特性検定試験を実施し、2年目の生育・収量を明らかにした。また、北海道農業研究センターが育成したフェストロリウム2系統とガレガ2系統、サイレージ用とうもろこし2系統のオホーツク地域での適応性検定試験を実施した。ホクレンとの共同研究「良質安定多収に貢献する高TDNチモシー品種の開発促進」では、チモシーの中生及び早生の育成系統の生産力検定試験と極早生育成系統の採種試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試験」では、牧草4草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した。そのほか、「科学研究費助成事業、牧草への家畜育種法-BLUP法への応用」では、BLUP法のチモシー育種への適用性を検討している。また、「高精度播種に対応したチモシー主体草地の安定造成播種量の設定」では、チモシーの高精度播種時の新たな播種量基準の設定に取り組んでいる。

4) 栽培環境に関する試験

生産環境グループ(栽培環境)は、土壤肥料(資材試験を含む)および環境保全に関する研究を実施している。

本年度は、本年度終了課題「新たな品種および栽培法に対応した飼料用とうもろこしの窒素施肥法の確立」を「土壤診断による飼料用とうもろこしの窒素施肥対応」(根釧農試と共同)、前年度終了課題「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 1)パン・中華めん用小麦の開発促進と普及支援 (4)硬質秋まき小麦『つるきち』の生育特性に対応した栽培法の確立」を「硬質秋まき小麦「つるきち」の高品質安定栽培法」(地域技術G、中央農試、十勝農試と共同)としてとりまとめて北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、それぞれ平成29年普及推進事項、指導参考事項に採択された。

継続課題としては、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「農地土壤炭素貯留等基礎調査事業」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「新たな品種および栽培法に対応した飼料用とうもろこしの窒素施肥法の確立」(根

釧農試と共同)、「道東地域の秋まき小麦に対する肥効調節型肥料を用いた追肥省略技術の確立」、「畑作物に対する苦土質肥料『軽焼マグネシウム』の肥効評価」(十勝農試と共同)

「土壤凍結深制御技術を応用した畑地の理化学性改善による生産性向上」(十勝農試、北農研と共同)、「土壤凍結深制御法としての雪踏みの特性と活用法」、「農作物病虫害診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壤調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試、花野センターと共同)、「オホーツク地域における客土材の土壤分析」を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進 3)栽培改善による生産および品質の安定化 (1)秋まき小麦『きたほなみ』の子実タンパク質含有率安定化のための気象情報対応型窒素施肥法」(中央農試、十勝農試と共同)、「飼料用とうもろこしに対する塩化カリ肥料の施用効果」(根釧農試と共同)である。

5) 病虫害に関する試験

生産環境グループ(病虫)は、畑作物および園芸作物の病虫害防除対策試験、農作物病虫害診断試験、新農業資材実用化試験(新農薬効果査定試験)および病虫害発生予察事業を実施している。

本年度は、終了課題である「防除薬剤の残効期間と品種の抵抗性に対応したテンサイ褐斑病の防除」を成果名「てんさいの褐斑病の多発傾向に対応した薬剤防除対策」として、同じく「農薬(D-D剤)適用病虫害拡大試験」を「ばれいしょのジャガイモシロシストセンチュウに対する1,3-ジクロロプロペン油剤の効果」としてとりまとめた。これらは、北海道農業試験会議(成績会議)に提案し、平成29年指導参考事項に採択された。

前年度から継続して実施した課題は「ムギ類変異集団の作出と利用」(麦類Gと共同)、「病虫害発生予察調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野センターと共同)、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試、上川農試、

十勝農試、道南農試と共同)、「実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試と共同)、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発強化」(作物育種G、十勝農試と共同)、「タマネギ小菌核病の気象情報による発生予測に基づいた効率的防除対策」、「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性育種素材の簡易検定法の改良」である。

本年度、新たに実施した課題は「ジャガイモシロシストセンチュウの効果的な防除法の開発 1 ジャガイモシロシストセンチュウの大規模ほ場における防除技術体系の確立 (1) 化学的防除の実施と効果の検証 (3) 物理的防除による感染源の低減効果の検証」である。また、職員奨励研究として「ばれいしょ疫病初発予測システム(FLABS)改良へのアプローチ」を実施し、疫病初発に関わる圃場環境条件の整理を行った。さらに、機動的調査(ジャガイモシロシストセンチュウの防除対策確立に向けた予備的試験)を実施した。

新資材試験では、殺菌剤5剤および殺虫剤3剤が北海道農業試験会議(成績会議)において指導参考事項に採択された。

6) 畑作物および野菜に関する試験

地域技術グループは豆類やてん菜などの畑作物および野菜類の新品種育成・栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、大豆系統適応性検定試験として「地域適応性検定試験」で網走現地圃場において十系系統の適応性の検定を行った。「奨励品種決定基本調査」で大豆の十育系統3系統、「地域適応性検定試験」で小豆の十育系統4系統、菜豆の十育系統6系統の検定を行った。「新優良品種普及促進事業」では、菜豆の十育系統3系統を作付けし、うち2系統の種子生産を行った。公募型研究では網走現地圃場などにおいて、大豆では「ダイズ裂開粒の発生機構解明および裂開抵抗性マーカーの開発」として、中期～後期世代系統の適応性などの検定を行った。小豆では「道東の早生小豆栽培地域における生産安定性の向上」として、早生小豆品種のオホーツク地域向け栽培密度指針の確立に向けた場内・現地調査を行った。花

豆では「花豆の高品質省力化に向けた収穫・栽培法の検討」試験で、栽培試験、アシストスーツ試験および機械収穫試験等を行った。

てんさいの品種選定では、「てん菜輸入品種検定試験」として民間育成の9系統、「気候変動に対応したテンサイの安定生産を可能にする高度病害抵抗性品種の開発」として、北農研育成の1系統を検定した。民間育成系統「HT39」(ライエン)が北海道優良品種に認定された。その他の輸入系統は継続検討が4系統、廃棄が4系統である。北農研系統では、継続が1系統である。そう根病抵抗性検定圃場では、黒根病が多発したため、判定は収量成績を用いず退緑黄化症状のみで行った。

てんさい病害に対する試験では、「防除薬剤の残効期間と品種の抵抗性に対応したテンサイ褐斑病の防除」の成果をとりまとめて、指導参考事項となった。

たまねぎ品種開発では、「加工業務用たまねぎ系統の特性検定試験」で、共同育成した「北見交67号」の生産力検定試験、特性検定試験及び地域適応性検定試験を行った。熟期は中生であったが、目標とする長球形の揃いが劣ったため、共同研究先と協議のうえ、試験を中止した。「たまねぎ有望系統の特性検定試験」では、民間育成有望系統15系統の特性を調査した。重点研究「たまねぎ新品種「ゆめせんか」の加工特性解明と高品質安定生産技術確立による需要促進」では、北見農試育成品種「ゆめせんか」の加工利用上の優位性(焦げにくさ、歯ごたえ)の機作を明らかにし、これを活かせる製品を試作検討した。また、安定供給するための栽培法や供給可能期間を確認し、平成29年指導参考事項となった。また、「輸出向け低コスト生産に向けた直播たまねぎの球肥大改善及び長期貯蔵技術の検討」では、窒素分施およびかん水に球肥大を改善する効果を認めた。

新資材試験は、てんさい除草剤1剤、大豆除草剤2剤、たまねぎ除草剤1剤(処理時期2)を検討した。

7) 地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議4

回、4者会議ならびに支援会議・地域関係者会議を開催し、地域ニーズの調査・対応等を行った。なお、本年度はプロジェクトチームで解決すべき地域課題はなかった。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については、研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

2 技術普及室の活動

a 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

畑作の支援テーマは、①ICT技術の効果的利用方法の確立、①でん粉原料用ばれいしょにおける、安定多収栽培技術の確立、③ジャガイモシストセンチュウ類の防除対策の確立、④土壌肥沃土マップを活用した可変施肥システムの普及推進、⑤共同利用を目指した機械化作業体系策定手法の習得、効率的な農業機械の運用に向けての検討、⑤QGISによるほ場マップデータの活用、⑥ばれいしょ施肥管理による増収技術の検討、⑦根室管内における麦類栽培の定着に向けた栽培支援、⑧根室管内におけるジャガイモシストセンチュウまん延防止に向けた意識啓発である。

園芸では、①いちご（リレー苗）の炭そ病診断に向けた技術支援、②にんじんの可変施肥技術確立への支援、③高糖度トマト栽培技術の安定化、④病虫害被害の抑制による収量の確保に対する支援、⑤小かぶ栽培におけるヒメダイコンバエ防除対策である。

経営では、①TMRセンターの現状と課題に関する情報提供の支援、②大規模酪農場の牛舎施設が備えるべき要件、③経営シミュレーションを活用した将来像の検討、④経営計画作成ソフト「夢道場」の使用 방법에、⑤有機物を利用した牧草・飼料用とうもろこしの施肥設計、⑥草地マップ作成のためGISの導入と活用導入後の実践支援である。

また、各専門部会研修、地域課題解決研修、各担当者会議に対して支援した。さらに、害虫や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたる。

b 調査研究の実施

調査研究は5課題である。1つ目は、根室管内における秋まき小麦の栽培定着で、窒素施肥、病虫害防除について情報提供した。施肥作業は、コントラクタが実施しており、施肥時期が遅れる傾向にあったものの、粗麦収量450kg/10aとなり、史上最高となった前年より低収であったものの製品歩留まりは目標である80%を確保できた。窒素施肥法や病虫害防除の適正化を更に進めるとともに、今後は小麦の定着のために排水性改善を進めていく必要がある。

2つ目は、馬鈴しょの安定生産技術の確立である。でん粉原料用馬鈴しょの低収要因として、各地区で原因が異なる事が明らかになった。美幌地域では土壌の物理性の悪化、網走地域ではバーテシリウム、シストセンチュウや微量要素の欠乏など、清里地域では、不良下層土の影響などが原因として整理された。

3つ目は、オホーツク管内における協業法人の設立・運営方法・支援体制の整理である。協業法人（勝山グリーンファーム：置戸町）の経営調査を実施した。調査内容は、①経営の概要、②法人の経緯、③農作業の進め方、④経理と労務、⑤生産性向上の取組み、⑥設立当初に抱えた問題点、⑦現在抱えている問題点、⑧将来目指していること、⑨関係機関に求めることの9項目について取りまとめた。その中で、普及センターと協議し、5項目について支援を実施することにした（①防除とカルチの使い方、②野良いも対策、③作業体系の整理、④将来の機械体系の提案、⑤他協業法人の事例調査の提供）。今年度、解決できなかった項目については、来年度実施する。

4つ目は、オホーツク管内におけるたまねぎのネギハモグリバエの発生調査と実態確認である。ネギハモグリバエの、オホーツク地域での露地における越冬の可能性を検討するため調査を行った。

普及センター本所に、平成27年ネギハモグリバエが多発したながねぎほ場での調査を提案した。②調査は、普及センター本所園芸担当者が農業者と協議し、5月から概ね1週間ごとに粘着板による捕殺調査を実施した。③コンテナに防虫ネットをはり、外からの飛び込みを防ぎ、土壌からの蛹が成虫になるかを調

査した。④ネギハモグリバエの捕殺は確認されなかった。ただし、残渣物の多い調査地点では、他のハエ類の捕殺が非常に多く、残渣物の処理方法について指導できるデータを得る事ができた。⑤データは、地区対策会議の資料として用いる。⑥専用の飼育ネットを用い、越冬調査を継続することや、ながねぎの育苗ハウスでの調査を継続することを提案した。

5つ目は、アブラナ科作物の安定生産技術の確立である。だいこんとブロッコリーでは、研究・普及センター北根室支所・普及室でヒメダイコンバエの登録農薬に向けた試験を実施し、薬剤ごとの効果の有無を確認できた。農薬メーカーと、今後の登録に向けて情報交換を行っている。

ブロッコリーでは、普及センター本所・北根室支所・普及室で、不織布を被覆した物理的防除を検討した。その結果、ヒメダイコンバエの被害は軽減された。今後、1戸当たり作付け面積が小さく、登録農薬の少ない、カリフラワー生産者に結果を紹介し、導入の検討を進める。

c 地域農業支援会議活動

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトとしての取組はなかった。

d 農業試験場における普及指導員の研修実施

本年度の高度専門技術研修（畑作）は計画されなかった。

e 農業協同組合等の営農指導機能強化の支援

JA営農指導員研修（耕種部門）は、7月8日、9月15日に実施した。北見農試技術普及室が担当した項目は、「農薬・病虫害防除の基礎知識」、「GPS・GISの基礎知識」である。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 浅山聡. 秋まき小麦種子審査のための休眠打破方法. 北海道立総合研究機構農業試験場集報100: 55-63 (2016.6).
- 大西志全. バーコードを利用した小麦育種におけるルーチン作業の効率化. 北農 84(1): 43-46 (2017).
- 坂井祐希・来嶋正朋・足利奈奈・神野裕信・三浦秀穂・大西一光. 春まきコムギ「はるきらり」を遺伝背景としたスペルトコムギ由来の戻し交雑自殖系統における子実タンパク質含有率の評価. 帯広畜産大学紀要 37: 25-32 (2016).
- 笠島真也・今井康太・清水隆大・伊藤博武・中丸康夫・吉田穂積・佐藤三佳子・神野裕信・吉村康弘・高橋肇. 北海道における秋播性コムギ新旧品種きたほなみとホクシンの生育・収量特性の差異. 日本作物学会紀事 85: 155-161 (2016).
- K. Murai, H. Ohta, M. Kurushima, N. Ishikawa. Photoperiod-sensitive cytoplasmic male sterile elite lines for hybrid wheat breeding, showing high cross-pollination fertility under long-day conditions. Euphytica 212: 313-322 (2016).
- 阿部珠代・小宮山誠一・小林聡・西村努・神野裕信. マイクロドウラボによる小麦粉生地物性の少量・簡易評価. 日本作物学会紀事 85(4):435-442 (2016)
- 品田博史・佐藤毅・沼尾吉則・吉村徹・尾崎洋人・木下雅文・粕谷雅志・木内均・前川利彦・平山裕治・相川宗厳・丹野久・田中一生・佐々木忠雄・菊池治己・長田亨. 水稻新品種「きたゆきもち」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報100: 23-31 (2016.6).
- 黒崎英樹・藤田正平・大西志全・鴻坂扶美子・田中義則・竹内薫・山下陽子・木口忠彦・樋浦里志. ダイズ新品種「スズマルR」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報101: 1-13 (2017.3).
- 木下雅文・尾崎洋人・其田達也・田中一生・平山裕治・菅原彰・藤井はるか・柳原哲司. 水稻新品種「そらゆき」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報101: 21-32 (2017.3).
- 鈴木千賀・三好智明・白井滋久・湯本節三・田中義則・萩原誠司・山口直矢・黒崎英樹・山崎敬之・大西志全. MASによりシストセンチウ・レース1抵抗性を導入したダイズ新品種「ユキホマレR」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報101: 33-47 (2017.3).
- 足利和紀・田中常喜. チモシーの生育における遺伝子型とシロクローバ競合および無競合条件との交互作用の評価. 北海道畜産草地学会報 4: 81 (2016).
- 足利和紀・藤井弘毅・田中常喜・吉澤晃・佐藤公一・玉置宏之. チモシー新品種「なつぴりか」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報100: 1-14 (2016.6).
- 篠田英史・出口健三郎・飯田憲司・足利和紀・増子孝義. 牧草中の可溶性炭水化物含量測定におけるアンスロン法の改変. 日本草地学会誌 62: 1-7 (2016).
- 中辻敏朗・笛木伸彦・中津智史・鈴木慶次郎・志賀弘行. 地下水の硝酸汚染リスク評価指標としての窒素環境容量の有効性. 日本土壌肥科学雑誌 87: 360-364 (2016).
- 笛木伸彦・小野寺政行. テンサイへの塩化カリウム施用が後作物(バレイショ・豆類)に及ぼす影響. 北農 83: 462-469(2016).
- 松中照夫・中辻敏朗・大塚省吾・木曾誠二. 重粘土草地の更新時における土地改良と堆肥大量施与の牧草生産からみた評価. 日本草地学会誌 62: 189-198 (2016).
- 黒崎英樹・唐星児・林哲央・中村隆一. 北海道北見地域における虎豆の栽培技術—早期出荷を目的とした栽培方法—. 日本作物学会記事 86: 24-31 (2016).
- 小野寺鶴将. ジャガイモシストセンチウ発生圃場における密度推定のための省力的な土壌サンプリング法. 北農 84(1): 31-35 (2017).
- 池谷美奈子・野津あゆみ・白井佳代. 異なる接種時期からみたタマネギの灰色腐敗病に感染しやすい生育ステージ. 北日本病害虫研究会報 67: 108-111 (2016).

- S. Ikeda, T. Hoshino, N. Matsumoto, N. Kondo. Rot diseases of carrot and rapeseed caused by *Typhula* species under snow in Hokkaido, Japan. *Journal of General Plant Pathology* 82 : 286-291 (2016).
- S. Ikeda, T. Hoshino, N. Matsumoto, N. Kondo. Airborne basidiospore as an inoculum source of *Typhula variabilis* and the effect of hilling on the incidence of *Typhula* winter rot of carrots. *Journal of General Plant Pathology* 83 : 46-50 (2016).
- 池田幸子. 双子葉植物に雪腐病を起こす*Typhula*属菌の分類学および生態学的研究. 道総研農業試験場報告145 : 1-44 (2016).
- T.Narabu, T. Ohki, K. Onodera, T.Fujimoto, K.Itoh and T.Maoka. First Report of the Pale Potato Cyst Nematode, *Globodera pallida*, on Potato in Japan. *Plant Disease*, 100 : 1794(2016).
- S. Tanaka, M. Nakano, F. Komai, D. Yanagida, M. Iritani, S. Koyano, Y. Shiga and H. Araki. Development of onion cropping methods and breeding of short day cultivars for early shipment in Hokkaido Japan. *Proceeding of the VII International Symposium on Edible Alliaceae, Acta Horti* 1143 : 45-47 (2016).
- 池谷聡・大波正寿. テンサイ新品種「あままる」の特性. 北海道立総合研究機構農業試験場集報100 : 71-76 (2016.6).
- 池谷聡・大波正寿・山崎敬之. テンサイ新品種「アンジー」の特性. 北海道立総合研究機構農業試験場集報100 : 77-81 (2016.6).

2) 口頭発表

- 竹中秀行. 農業へのICT導入・活用における課題と普及の役割. 平成28年度地域課題解決研修第2回研修会(訓子府町、2016.9.2)
- 竹中秀行. 北海道農業の目指すべき方向と研究機関の役割. 北海道大学農業生産工学特別講演会(札幌市、2016.11.10)
- 竹中秀行. 先進技術で地域は持続できるか. 平成28年度北海道普及研究大会(札幌市、2017.2.15)
- 竹中秀行. 北海道における機械化技術の役割. 訓子府町主催場長講演会(訓子府町、2017.3.22)
- 来嶋正朋、足利奈奈、神野裕信. 北見農試の穂発芽耐性に優れる春まき小麦有望系統. 第20回穂発芽研究会(訓子府町、北見市、2015.7.4-5)
- 其田達也・大西志全・粕谷雅志・神野裕信. 北見農試の硬質秋まき小麦における穂発芽耐性系統の育成状況. 第20回穂発芽研究会(訓子府町、北見市、2015.7.4-5)
- 大西志全・佐藤三佳子・粕谷雅志・其田達也・神野裕信. 灰分簡易測定法の導入と子実灰分の初中期世代における選抜効果の検証. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会(札幌市、2016.12.3)
- 神野裕信・鈴木孝子・大西志全・粕谷雅志・其田達也. 半数体倍加系統におけるコムギ赤さび病抵抗性遺伝子Lr34の農業特性への影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会(札幌市、2016.12.3)
- 粕谷雅志. 北海道におけるコムギ病害と抵抗性育種. ムギ類研究会イブニングワークショップ「わが国におけるムギ類病害の現状を知る」(倉敷市、2016.12.10)
- 大西志全、粕谷雅志、其田達也、神野裕信. コムギ育種における群落表面温度(CT)を使った収量性選抜の可能性. 日本育種学会第131回講演会(名古屋市、2017.3.29-30)育種学研究第19巻別冊1号 : 52
- 粕谷雅志・大西志全・其田達也・吉村康弘・鈴木孝子・神野裕信. コムギ縞萎縮病と眼紋病抵抗性QTLを導入した秋まき小麦準同質遺伝子系統の農業特性と品質特性. 日本育種学会第131回講演会(名古屋市、2017.3.29-30)育種学研究第19巻別冊1号 : 34
- 鎌田貴大・中根わかな・西村努・神野裕信・森正彦・三浦秀穂. 秋まき穂発芽性極難コムギにおける種子休眠性 QTLs の検出. 日本育種学会第130回講演会(鳥取市、2016.9.24-25)第18巻別冊2号 : 226 (2016.9)
- 山田翔太・笠島真也・伊藤博武・神野裕信・大西志全. 乾物生産と窒素蓄積に着目した秋播性コムギ

- 品種「きたほなみ」の多収要因に関する研究. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会 (札幌市、2016. 12. 3)
- 林和希・山下陽子・大西志全・神野裕信. 海外品種由来の多収・大粒QTLを導入した秋まき小麦系統の農業特性. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会 (札幌市、2016. 12. 3)
 - 山下陽子・来嶋正朋・足利奈奈. 春まき小麦「春よ恋」由来の日長反応性に関するQTL解析. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会 (札幌市、2016. 12. 3)
 - 佐藤博一・木下雅文・丸田泰史・尾崎洋人・其田達也・宗形信也. 水稻新品種「空育181号」の特性とその多収要因. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会年次講演会 (札幌市、2016. 12. 3)
 - 西村努・鎌田貴大・中根わかな・神野裕信・中道浩司・阿部珠代・帛田淳史・大西一光・森正彦・三浦秀穂. 秋まき穂発芽性極難コムギに寄与する新たな穂発芽耐性QTLの組合せ効果. 日本育種学会第131回講演会 (名古屋市、2017. 3. 29-30) 育種学研究第19巻別冊1号: 240
 - 笠島真也・山田翔太・伊藤博武・神野裕信・大西志全・高橋肇. 窒素代謝からみた秋播性コムギ品種「きたほなみ」の多収要因. 日本作物学会第243回講演会 (東京都、2017. 3. 29-30) 講演会要旨集: 123
 - 丸田泰史・佐藤博一・木下雅文・尾崎洋人・其田達也・宗形信也. 北海道向け多収性専用品種「そらゆたか」の特性と多収要因. 日本育種学会第131回講演会 (名古屋市、2017. 3. 29-30) 育種学研究第19巻別冊1号: 151 (2017)
 - 木下雅文・佐藤博一・尾崎洋人・其田達也・宗形信也. 業務用適性の高い北海道水稻品種「そらゆき」の特性と多収要因. 日本育種学会第131回講演会 (名古屋市、2017. 3. 29-30) 育種学研究第19巻別冊1号: 162 (2017)
 - 大波正寿・青山聡. 北見農試におけるでん粉原料用馬鈴しょ育種の現状と課題. 2016年度次世代バレイショセミナー (2016. 11)
 - 大波正寿. でん粉原料用馬鈴しょの新品種育成と最近の栽培技術. 平成28年度日本応用糖質科学会北海道支部シンポジウム (札幌市、2017. 2. 1)
 - 足利和紀・岡元英樹・田中常喜・藤井弘毅. チモシーの高水分サイレージ調製適性に関する選抜指標の探索. 北海道畜産草地学会 (新得町、2016. 9. 10-12)
 - 田中常喜・田村健一・足利和紀・藤井弘毅. BLUP法アニマルモデルのチモシー育種への適用の試み. 2017年度日本草地学会弘前大会 (弘前市、2017. 3. 20-23)
 - 藤井弘毅・大塚博志・豊岡誠嗣・有江裕志・安達美江子・桑島啓輔・太田裕規・太田昌利・西村健太郎・足利和紀・田中常喜. チモシー早生新品種「なつちから」導入草地の植生変動と数種イネ科草種のストレス耐性から見た考察. 2017年度日本草地学会弘前大会 (弘前市、2017. 3. 20-23)
 - 小野寺政行・鈴木慶次郎・古館明洋・細川幸雄・木谷裕也. 北海道におけるタマネギ安定生産のための施肥法改善 第1報 窒素分施の効果. 日本土壌肥料学会2016年度佐賀大会 (佐賀市、2016. 9. 20-22)
 - 木谷裕也・小野寺政行・古館明洋・細川幸雄. 北海道におけるタマネギ安定生産のための施肥法改善 第2報 窒素分施とリン酸減肥の併用効果日本土壌肥料学会2016年度佐賀大会 (佐賀市、2016. 9. 20-22)
 - 中辻敏朗・小野寺政行. 道内たまねぎ主産地における近年の収量推移 - 気象要因との関係解析 -. 日本土壌肥料学会北海道支部大会 (帯広市、2016. 11. 29)
 - 岡元英樹・唐星児・熊谷聡・藤倉潤治. 局所施肥によるリン酸減肥は水稻栽培においても可能か?. 日本土壌肥料学会北海道支部大会 (帯広市、2016. 11. 29)
 - 八木哲生・唐星児・大塚省吾・松本武彦・酒井治・中辻敏朗・小野寺政行・富沢ゆい子・須田達也. 飼料用トウモロコシ畑の窒素肥沃度と収量水準に基づく窒素施肥量. 日本土壌肥料学会北海道支部大会 (帯広市、2016. 11. 29)
 - 小野寺鶴将. ヨーロッパにおけるジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性品種育種の現状. 日本植物病理学会北海道部会談話会 (札幌市、2016. 10. 19-20)
 - 奈良部孝・小野寺鶴将. ジャガイモシロシストセンチュウのカップ内発育における温度およびバレイショ品種の影響. 日本線虫学会大会 (東京都、2016. 9. 14-16)

- 村松康一・小野寺鶴将・相場勝・奈良部孝・伊藤賢治・相場聡・串田篤彦（農研機構北農研）. ジャガイモシロシストセンチュウ発生ほ場における土壌くん蒸剤(D-D 剤)の防除効果. 第70回北日本病害虫研究発表会（仙台市、2017.2.23-24）
- 池谷聡. 直播栽培と移植栽培におけるテンサイ品種の収量反応. 第14回てん菜研究会（札幌市、2016.7.20）
- 杉山裕・池谷美奈子・柳田大介・佐々木純. タマネギ乾腐病抵抗性圃場検定法の改良. 北海道園芸研究談話会報49:56-57(2016).

3) 専門雑誌記事

- 竹中秀行. オホーツク酪農の将来デザイナー先進技術普及の道程一. 農家の友5月号:21-23 (2016).
- 神野裕信. 第20回穂発芽研究会について. 北農84(1):107-108 (2017).
- 神野裕信. 新品種の紹介 二条大麦「札育2号」. 北海道米麦改良125号:6-8 (2017.3.31).
- 大波正寿. でん粉原料用ばれいしょ新品種「コナユタカ」の特性. 砂糖類・でん粉情報7月号:56-58 (2016).
- 松永浩. エチレン処理による早期出荷向け貯蔵法. ニューカントリー9月号:52-53 (2016).
- 藤井弘毅. 特集 ICTとロボットを活用した酪農の展望 牧草育種の動向と地域にあった栽培技術. 農家の友5月号:35-37 (2016).
- 中辻敏朗. 良質小麦生産のための施肥および土壌管理. 北海道米麦改良協会「北海道の小麦づくり」平成29年:61-87 (2017).
- 中辻敏朗. 温暖化は北海道の馬鈴薯や他の畑作物にどう影響するか. ポテカル109 (2017.2.1).
- 小野寺政行. 窒素分施で移植たまねぎの生産安定. ニューカントリー4月号:16-17 (2016).
- 小野寺政行・木谷祐也. 移植たまねぎ安定生産のための窒素分施技術. あぐりぼーと4月号:8(2016)
- 小野寺政行. 遠紋地域における飼料用とうもろこし畑の生産阻害要因と土壌・肥培管理法. 農家の友5月号:24-26 (2016).
- 小野寺政行. 移植たまねぎ安定生産のための窒素分施技術. 土づくりとエコ農業8・9月号:17-21 (2016).
- 小野寺政行. 土壌物理性を考慮したサイレージ用とうもろこし圃場の秋の管理. 農家の友10月号:80-82 (2016).
- 小野寺政行. 元肥を減らして初期生育アップ タマネギに育苗中リン酸施肥. 現代農業10月号:180-183 (2016).
- 小野寺鶴将. ジャガイモシロシストセンチュウ発生圃場における密度推定のための省力的な土壌サンプリング法. ニューカントリー10月号:50-51 (2016).
- 小野寺鶴将. 「役に立つ農薬の知識」【殺虫剤】農薬による効率的な病虫害防除（大豆の害虫防除）. ニューカントリー2月号:78-79 (2017).
- 池谷美奈子. なるほど新技術 たまねぎ 灰色腐敗病の多発を回避する効率的防除法. ニューカントリー8月号:56-57 (2016).
- 池谷美奈子. 役に立つ農薬の知識 殺菌剤 効率的な病虫害防除. ニューカントリー1月号:74-75 (2017).
- 池田幸子. なるほど新技術 秋まき小麦 ニバーレ菌による葉枯症状発生要因と赤かび病の防除. ニューカントリー3月号:48-49 (2017).
- 田中静幸. たまねぎの寒地秋栽培技術. ニューカントリー1月号:70-71 (2017).
- 池谷聡. 病気に強いてんさい新品種「KWS 2K314」. ニューカントリー6月号:54-55 (2016).
- 池谷聡. 病気に強いてんさい新品種「KWS 2K314」の特性. 農家の友8月号:78-79 (2016).
- 池谷聡. てん菜品種の直播栽培適性について. 砂糖類・でん粉情報No.50 (2016.11.10).
- 池谷聡. 平成28年産てん菜の生産実績とその要因について. てん菜協会だより第125号 (2017.1.27).
- 池谷聡. 平成27年産てん菜の生産実績について. てん菜協会だより 第122号:3-5 (2016年).
- 杉山裕. 加工適性と貯蔵性が高い長球たまねぎ「北見交65号」. 農家の友4月号:40-41 (2016).
- 杉山裕. 加工適性と貯蔵性に優れる長球たまねぎ「北見交65号」. ニューカントリー4月号:12-13

(2016).

- 杉山裕：実需者ニーズに応える長球・高乾物率タマネギ「北見交65号」、JATAFFジャーナル、vol.5, No.1:26-27(2017).
- 三宅俊秀．良質小麦安定生産のための基本的な考え方．北海道米麦改良協会「北海道の小麦づくり」平成29年：1-45（2017）.
- 三宅俊秀．特集 平成28年度技術総括 畑作（馬鈴しょ・てん菜）．農家の友12月号（2016.12）
- 三宅俊秀．特集Ⅰ 2017作物展望 小麦は播種時期を確認、的確な施肥で茎数管理を．ニューカントリー1月号（2017.1）
- 三宅俊秀．平成27年産小麦の総括．北海道米麦改良第114号（2017.1）
- 三宅俊秀．高品質安定生産に向けた栽培技術．明日の豆作り：33-38（2017.1）

4) 著編書、資料

- 竹中秀行．北海道農業における先端工学技術の活用 特集企画を終えるにあたって．北農83(3)：27（2016）.
- 神野裕信．北海道の小麦づくり Ⅱ小麦品種の特性と栽培上の留意点．平成29年度「北海道の小麦づくり」：47-59（2017.2）
- 来嶋正朋．国際育種機関・CIMMYT の小麦育種．北農83(3)：72-77（2016）.
- 大西志全．アメリカコーンベルトの農業と大豆育種．北農83(4)：83-89（2016）.
- 足利和紀・藤井弘毅・田中常喜．とうもろこし（サイレージ用）新品種「P8025（X80A397）」．北農83(2)：170（2016）.
- 小野寺政行．土壌改良資材と育苗培土の利用法．土づくり技術情報「野菜編」．：37-52.北海道農協「土づくり」運動推進本部（2017）.
- 星野保・池田幸子．「驚きの菌ワールド ―菌類の知られざる世界―」のうち「きのこの持つジグソーパズル」．日本菌学会編 東海大学出版部（2017.2.28）
- 池谷聡．テンサイ新品種「KWS 2K314」．北農83(2)：167（2016）.
- 杉山裕・田中静幸・柳田大介．たまねぎ新品種「北見交65号」．北農83(2)：168（2016）.
- 八木亮治・地子立・平井剛・福川英司・木村文彦・田中静幸．メロン新品種「空知交23号」．北農82：200（2015）.
- 山岸修一．普及と研究が連携した受胎率向上技術の経済効果試算方法．農業普及研究(2017.1)

5) 新聞記事

- 松永浩．エチレン処理によるポテトチップス加工用バレイショの早期出荷貯蔵技術．農業共済新聞（2019.9.14）
- 足利和紀．サイレージ用とうもろこし「P8025（X80A397）」の特性．日本農業共済新聞（2017.2.28）.
- 小野寺政行．移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術．農業共済新聞（2016.5.18）.
- 小野寺政行．タマネギの窒素分施肥技術．日本農業新聞（2016.12.27）
- 木場稔信．春先の畑地の排水対策．農業共済新聞「北海道営農技術版」（2017.3.29）.
- 池田幸子．秋まき小麦の雪腐病対策のポイント．日本農業新聞（2016.10.13）.
- 池谷聡．病気に強いてんさい新品種「カーベ2K314（KWS 2K314）」．日本農業共済新聞(12月1週号)．
- 杉山裕：たまねぎ「北見交65号」で加工向け販路拡大、日本農業新聞(2017.3.7)．
- 杉山裕：加工・業務分野の販路拡大へ長球タマネギ「北見交65号」、日本農業共済新聞(3月1週号)．
- 三宅俊秀．畑作・今年の課題 農業共済新聞「北海道営農技術版」

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- (1) 二条大麦新品種「札育2号」
- (2) ばれいしょ新品種「CP08 (ゆきふたば)」
- (3) てんさい新品種「HT39(ライエン)」
- (4) チモシー新品種「Bor0102(品種名未定)」
- (5) チモシー新品種「SBT0904(品種名未定)」
- (6) アルファルファ新品種「SBA0901(品種名未定)」

2) 普及推進事項

- (2) フェストロリウム新品種「北海1号(品種名未定)」
- (2) 土壌診断による飼料用とうもろこしの窒素施肥対応

3) 指導参考事項

- (1) ばれいしょ「コナユタカ」の安定生産技術
- (2) たまねぎ「ゆめせんか」の加工特性と安定栽培法
- (3) 硬質秋まき小麦「つるきち」の高品質安定栽培法
- (4) てんさいの褐斑病の多発傾向に対応した薬剤防除対策
- (5) 除草剤
 - ①飼料用とうもろこしの播種後出芽前における一年生雑草全般に対する「NK-1101水和剤」処理
 - ②飼料用とうもろこしの3~5葉期における一年生雑草全般に対する「SL-573フロアブル」処理
 - ③てんさい(直播)に対する除草剤「UPH-002フロアブル」の実用化
 - ④てんさい(直播)に対する除草剤「BAS-656乳剤」の実用化
 - ⑤てんさい(移植)に対する除草剤「UPH-002フロアブル(ビートアップ)」の実用化(育苗期)(未登録)
 - ⑥はっかに対する除草剤「NP-55乳剤(ナブ乳剤)」の実用化(マイナー作物)(未登録)
- (3) 殺虫・殺菌剤
 - ①小麦の赤かび病(DON濃度低減)に対するテブコナゾール・キャプタン水和剤(未登録)の効果
 - ②小麦の赤かび病(ニバーレ菌)に対するキャプタン水和剤(未登録)の効果
 - ③小麦の赤かび病(ニバーレ菌)に対するテブコナゾール・キャプタン水和剤(未登録)の効果
 - ④小麦のアブラムシ類に対するクロチアニジン水溶剤の効果
 - ⑤ばれいしょのジャガイモシロシストセンチュウに対する1,3-ジクロロプロペン油剤の効果
 - ⑥たまねぎの小菌核病に対するプロシミドン水和剤の効果
 - ⑦たまねぎの小菌核病に対するポリオキシシン水和剤の効果
 - ⑧ブロッコリーのヒメダイコンバエに対するクロラントラニリプロール・ジノテフラン水和剤DF(未登録)の効果

4) 研究参考事項

3 品種登録・特許申請

- たまねぎ「ゆめせんか」、柳田大介、西田忠志、野田智昭、田中静幸、杉山裕、出願日-2012/12/12、出願番号-27652、出願公表日-2013/3/25、登録年月日-2016/6/13、登録番号-25235
- たまねぎ「北見48号」、柳田大介、宮浦邦晃、中野雅章、志賀義彦、田中静幸、入谷正樹、駒井史訓、小谷野茂和、出願日-2012/12/12、出願番号-27653、出願公表日-2013/3/25、登録年月日-2016/6/13、登録番号-25236
- ばれいしょ「リラチップ」、大波正寿、伊藤武、入谷正樹、田中静幸、千田圭一、池谷聡、藤田涼平、古川勝弘、江部成彦、出願日-2013/7/11、出願番号-28351、出願公表日-2013/11/22、登録年月日-2016/7/6、登録番号-25277
- たまねぎ「すらりっぷ」、杉山裕、柳田大介、田中静幸、近藤友宏、大野幸宏、出願日-2017/2/15、出願番号-31822

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	H28. 4. 19	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 5. 19	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 6. 8	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 7. 11	農試会議室	場員
新規課題場内検討会議	H28. 6. 28	農試講堂	場員
定例庁内会議	H28. 8. 3	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 9. 15	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 10. 12	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 11. 2	農試会議室	場員
現地委託試験成績検討会	H28. 12. 2	JAきたみらい訓子 府地区事務所 3階大会議室	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等
定例庁内会議	H28. 12. 8	農試会議室	場員
成績会議場内検討会	H28. 12. 12, 15	農試講堂	場員
定例庁内会議	H29. 1. 12	農試会議室	場員
定例庁内会議	H29. 2. 6	農試会議室	場員
設計会議場内検討会	H29. 2. 7, 8	農試講堂	場員
定例庁内会議	H29. 3. 1	農試会議室	場員
現地委託試験設計検討会	H29. 3. 23	農試講堂	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員 長：島田研究部長

事務局 長：浅山 聡(ほ場管理)、山井雅之(施設等整備)

委 員：佐々木 賢、伊藤幸雄、神野裕信、大波正寿、藤井弘毅、小野寺政行、
小野寺鶴将、萩原誠司、奥山昌隆

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：平成28年5月19日

- 1) 平成29年度施設整備等要望について
- 2) 施設等点検を踏まえた保全状況報告について

第2回：平成28年10月5日

- 1) 平成28年度防風林設備について

第3回：平成29年1月30日

- 1) 平成29年度試験研究用備品の予算要望について
- 2) 防風林整備に係わる平成28年度の状況及び平成29年度の計画について

第4回：平成29年3月24日

- 1) 平成29年度の防風林整備について

2)平成30年度以降のほ場整備施工要望計画について

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：浅山聡

委員：伊藤幸雄、其田達也、中山輝、足利和紀、唐星児、池田幸子、杉山裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月14日

- 1)業務委員会開催要領
- 2)麦類G（管理）業務体制
- 3)室外契約職員体制
- 4)月間作業予定
- 5)週間作業予定
- 6)作付計画
- 7)4月下旬の作業予定

② 定例委員会：4月21日から10月27日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1)機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2)室外契約職員週間作業計画

③ 第1回臨時委員会：平成29年3月16日

- 1)平成29年度室外契約職員の応募状況、面接方法

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：立山裕之、来嶋正朋、藤井弘毅（図書連絡委員兼務）、木場稔信、奥山昌隆

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月18日

- 1)図書連絡委員の選任
- 2)今年度業務内容の確認

② 第2回委員会：平成28年11月16日

平成29年度定期刊行物購入計画の策定

③ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：稲村浩至、足利奈奈、中山輝、池田幸子、池谷聡（システム管理者兼務）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月18日

- 1)システム管理者の選任
- 2)業務分担の確定
- 3)北見農試ホームページ更新マニュアルの利用について
- 4)場内LANDISK管理について

② 場内共有Landiskのフォルダ整理

9月5日～15日にかけて、場内共有Landiskのフォルダを整理。

③ ホームページの更新：19回実施

5) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

委員：中山利彦、其田達也、足利和紀、小野寺鶴将、田中静幸（兼任）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月15日

- 1) 本年度の委員について
- 2) オートクレーブのトラブルについて
- 3) 蒸留水製造装置の採水パイプ破損について
- 4) フロンガス点検
- 5) 懸案事項

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：島田尚典

事務局長：富田謙一

気象担当：中辻敏朗

とりまとめ：松永 浩

委員：粕谷雅志、足利奈奈、松永 浩、池谷 聡、萩原誠司、足利和紀、田中常喜、
杉山 裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月13日

- 1) 定期作況報告の実施体制
- 2) 定期作況調査報告実施要領
- 3) 年間日程
- 4) 具体的作業日程と該当作物
- 5) 最終作況の判定基準

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：島田尚典

事務局：山井雅之、中辻敏朗

委員：中出秀信、来嶋正朋、青山聡、田中常喜、木場稔信、小野寺鶴将、萩原誠司、奥山昌隆、
千石由利子

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成28年4月19日

- 1) 実施方針について
- 2) イベント内容と班編制およびリーダーについて
- 3) 試食・クイズラリー景品用の馬鈴しょとたまねぎ作付について
- 4) 今後の進め方について

- ② 公開デーへの参画依頼に係る網走水試との打合せ：平成28年5月23日
 - 1) これまでの開催実績について
 - 2) 網走水試による出展について
- ③ 第2回委員会：平成28年5月24日
 - 1) 各イベントへの職員配置について
 - 2) イベント企画案について（たたき台の提示）
 - 3) イベントの追加について（北海道農業改良普及協会による書籍販売）
 - 4) 物品購入、契約職員の必要人数、机・椅子の必要数について
- ④ 第3回委員会：平成28年6月28日
 - 1) イベント準備の進捗状況報告
 - 2) 購入物品のとりまとめ結果について
 - 3) ポスター案の検討
 - 4) 今後の作業スケジュールについて
- ⑤ 第4回実行委員会：平成28年8月3日
 - 1) イベント準備の進捗状況最終報告
 - 2) 前日から当日の流れについて
 - 3) 当日の配布チラシについて
- ⑥ 第5回実行委員会：平成28年10月21日
 - 1) 開催結果の概要報告
 - 2) 来場者アンケート集計結果の報告
 - 3) 公開デーに係る場員からの意見・反省点・改善方向への対応について
 - 4) 来年度の開催日について（後日の庁内会議での承認により平成29年8月9日に決定）
 - 5) 各イベント実施手順等の引き継ぎについて

8) オホーツク圏農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

事務局：山井雅之、浅山 聡、富田謙一、中辻敏朗

実行委員：大西志全、松永 浩、足利和紀、小野寺政行、池谷美奈子、萩原誠司

(2) 活動内容

- ① 第1回実行委員会：平成29年1月12日
 - 1) 準備経過確認（10月12日、12月8日庁内会議提案）
 - 2) 口頭発表課題の確認およびパネル展示候補課題の選定（案）
 - 3) 開催案内チラシの作成について
 - 4) 要旨原稿集約・編集担当の選定
 - 5) パネル集約担当の選定
 - 6) 口頭発表データ集約・編集担当の選定
 - 7) 広報および場内対応について確認
 - 8) その他準備
- ② 発表課題検討：平成28年12月8日（庁内会議）
- ③ 北見市端野町公民館との打ち合わせ：
 - 1) 平成28年10月12日 会場仮予約（2月21日）
 - 2) 平成29年2月9日
 - 出席者：田中静幸、奥山昌隆
 - 会場設備、当日進行等の確認

④口頭発表リハーサル：平成29年2月10日

口頭発表担当者：池谷 聡、萩原誠司、大波正寿、池谷美奈子、唐 星児、松永 浩、菅野千尋
(網走農業改良普及センター)

⑤セミナー開催：平成29年2月21日、13:00開会、16:00閉会、

9) その他委員会

(1) 安全衛生に係る意見交換会：平成29年3月1日

① 出席者 竹中秀行(管理責任者)、山井雅之(衛生推進者)、中山利彦(安全衛生担当者)
浅山 聡(支部長)、池谷 聡(執行委員)、
富田謙一、青山 聡、中辻敏朗、田中静幸

② 活動内容

平成28年度に実施した安全衛生関係の事業について説明

健康診断、労務災害、農作業安全、労働安全確保対策、環境測定結果、防火訓練、年休・
夏期・冬期休暇の取得状況、その他

(2) 公宅入居委員会：平成29年3月15日

① 出席者 山井雅之(場長指定・弥生町内会)、浅山 聡(支部長)、池谷聡(書記長代理)、
井口岳人(若葉町内会)、中山利彦(事務局)

② 活動内容

平成29年4月1日付け人事異動による公宅入居希望者の決定、
公宅管理を行っているオホーツク総合振興局総務課へ報告

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
北海道立総合研究機構北見農業試験場年報(平成27年度)	28. 7	45	1
「てんさいの褐斑病の多発傾向に対応した薬剤防除対策」成績会議参考成績書	29. 1	34	
オホーツク農業新技術セミナー発表要旨集	29. 2	39	250
平成28年度 飼料作物の育種に関する試験成績書	29. 3	90	40
平成27年度秋まき小麦育種試験成績書	29. 3	146	65
平成24年度春まき小麦育種試験成績書	29. 3	108	65

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名称	開催日	場所	内容	参加者
2016オホーツクIT・ロボット農業実践セミナー	H28. 6. 15	北見市技術文化ホール(中ホール)	事例報告2題、情報提供3題	293名
オホーツク冬のICT農業セミナー2017	H29. 2. 17	訓子府町交民会	講演2題、意見交換	227名
オホーツク圏農業新技術セミナー	H29. 2. 21	北見市端野町公民館	講演7題、ポスター18枚	169名

2) マスコミ、広報誌等による報道

タイトル	報道機関	掲載・放送日
北海道の「食」が地域経済を支える、農産・農産加工編	月刊クオリティ51 (11)、	H28. 11. 1
⑥「たまねぎ」	74-79	
北見で農業新技術セミナー	北海道新聞	H29. 2. 22

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 北海道小麦キャンプ2016inオホーツク

日時：平成28年7月12日～13日

場所：津別町生産者圃場、北見農試場内、J Aきたみらい小麦乾燥調整貯蔵施設、まちきた大通ビル、ホテル黒部

主催：北海道小麦キャンプ2016inオホーツク実行委員会

北見農試来場者：約80名

行事内容：「小麦と品種改良の最前線を見るバスツアー」（7月12日）にて、北見農試小麦育種圃場の見学会内および小麦育種についての屋内講義を行った。また「北海道小麦セミナー」（7月13日、ホテル黒部）にて、小麦の品種開発をテーマとしたパネル展示および講演を行った。

(2) 北見農試公開デー2016

日時：平成28年8月10日 9時30分～13時（受付は12時30分まで）

場所：場内

天候：晴れ（最高気温24.8℃）

来場者：194名（うち子供43名）

行事内容：クイズラリー（会場内7か所に各研究室出題のクイズ設置）、研究成果展示（新品種、栽培技術などのパネル展示、作物の展示）、畑作園芸相談コーナー（栽培法、肥料、病気、害虫などの技術相談、資料展示）、ほ場見学バスツアー（車中から見学、3回運行）、畑で働く農業機械展（4機種を展示）、試食コーナー（バターロール、ポテトチップ、ふかしいも、冷やし汁粉を提供）、おもしろ体験コーナー（箸で豆つかみ、小麦粉で粘土づくり）、網走水試コーナー（研究成果展示、ホタテ加工品の試食、ホッケー夜干しの脂質測定実演）、町内生産者グループによる地場産野菜等の販売、北海道農業改良普及協会による農業関連書籍の販売

5 見学受入れ

年月日	団体名	人数
H28. 4. 13	今治立花農業協同組合 米麦部会	7
H28. 4. 28	慶尚南道農業試験場・普及センター（韓国）	5
H28. 5. 31	佐呂間第一麦作利用組合	11
H28. 6. 16	池田町農協 そ菜生産組合玉ねぎ部会	9
H28. 6. 16	株式会社クボタ	7
H28. 6. 17	日本特産農作物種苗協会 網走特産種苗センター	8
H28. 6. 20	美幌町生産者（てん菜、小麦）	40
H28. 6. 21	網走農業改良普及センター所長・支所長会議	15
H28. 6. 22	芽室町畑作研究会	25
H28. 6. 24	小清水町大豆採種組合	6
H28. 6. 27	北見市立若松小学校 5年生	4

年月日	団 体 名	人 数
H28. 6. 30	浦幌町農協 畑作増産研究会	15
H28. 7. 1	佐呂間町農協 麦耕作生産協議会	10
H28. 7. 4	本別町美里別中地区自治会	15
H28. 7. 4	第20回穂発芽研究会	40
H28. 7. 6	J A北ひびき 青年部 剣淵支部	8
H28. 7. 8	北海道立農業大学校 研究科1年生	7
H28. 7. 8	有限会社 葵フーズ	1
H28. 7. 11	小清水町種子馬鈴薯採種組合	22
H28. 7. 12	鳥越製粉株式会社	3
H28. 7. 12	北海道小麦キャンプinオホーツク実行委員会	60
H28. 7. 14	オホーツク網走大豆部会	13
H28. 7. 15	J Aこしみず 駿農人養成セミナー第4期生	8
H28. 7. 15	美幌町馬鈴薯採種組合	18
H28. 7. 15	訓子府町4Hクラブ、清里町プライズクラブ、津別ノード	42
H28. 7. 21	エムシー・ファーターティコム株式会社 札幌支店	30
H28. 7. 21	常呂町農業青色申告会	6
H28. 7. 28	日本甜菜製糖株式会社 美幌製糖所	17
H28. 8. 8	佐賀県農業試験研究センター 白石分場	2
H28. 8. 19	ホクレン肥料(株) 営業担当者	31
H28. 8. 29	帯広畜産大学	3
H28. 8. 31	台湾高雄区農業改良場	3
H28. 9. 12	訓子府町立居武士小学校 5・6年生	8
H28. 10. 4	北見市立東陵中学校 第3学年	30
H28. 10. 5	北見市立東陵中学校 第3学年	30
H28. 10. 6	北見市立東陵中学校 第3学年	31
H28. 11. 25	本別町農業委員会	13

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

本場受入れ無し

2 講師派遣

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
学習会	JAきたみらい青年部訓子府支部畑作専門部	H28. 4. 6	土壌分析について	小野寺政行
中斜里製糖工場区域内畑作研究センター試験方案会議研修会	中斜里製糖工場区域内畑作農業研究センター運営協議会	H28. 4. 14	冬のハウス管理が決め手ーてん菜の西部萎黄病対策ー	池谷美奈子
施肥防除合理化推進連絡協会講演会	北見施肥防除合理化推進連絡協議会	H28. 4. 22	移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術 冬のハウス管理が決め手ーてん菜の西部萎黄病対策ー	小野寺政行 池谷美奈子
北海道農業土木協会研修会	北海道農業土木協会	H28. 6. 2	温暖化は北海道の農作物にどう影響するかー予測と対応ー	中辻敏朗
清里町馬鈴しょ採種組合連合会講習会	JA清里町	H28. 6. 20	アブラムシ防除を中心とした病害虫防除について	小野寺鶴将
小麦病害講習会	JAサロマ	H28. 7. 1	なまぐさ黒穂病について	池田幸子
オホーツクJA営農指導員技術研修会	JA北海道中央会北見支所	H28. 7. 6	土壌pHの測定法 農薬・病害虫防除の基礎知識	中辻敏朗 三宅俊秀
小麦病害講習会	訓子府4Hクラブ	H28. 7. 15	なまぐさ黒穂病について	池田幸子
オホーツクJA営農指導員技術研修	JA北海道中央会北見支所	H28. 9. 13	GPS・GISの基礎知識	三宅俊秀
農業改良普及員新任者早期養成研修	北海道農政部	H28. 9. 14	害虫診断の手順について	小野寺鶴将
たまねぎセミナー2016	北海道、花・野菜技術センター	H28. 11. 10	新しいたまねぎの施肥技術 たまねぎ新品種「北見交65号」	小野寺政行 杉山裕
訓子府町北栄地区研修会	網走農業改良普及センター本所	H28. 12. 1	土壌凍結促進技術に係る研修	小野寺政行
ポテトフォーラム2016	ポテトフォーラム実行委員会	H28. 12. 6	温暖化は北海道のバレイショや他の畑作物にどう影響するか	中辻敏朗
土づくり関する所内研修会	網走農業改良普及センター清里支所	H28. 12. 20	緑肥を活用した土づくり 土づくりを考える	小野寺政行 中辻敏朗
平成28年度豆作り講習会	公益財団法人日本豆類協会	H29. 1. 26	豆類において注意を要する病害虫	小野寺鶴将
第4回チャレンジアッププロジェクト意見交換会	訓子府町	H29. 1. 31	土壌凍結について	小野寺政行
常呂町農業試験成績報告・技術情報交換会	北見市農業振興会常呂自治区部会	H29. 2. 1	土壌凍結深制御技術を応用した畑地の理化学性改善による生産性向上について	小野寺政行

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
平成28年度日本応用糖質学会北海道支部シンポジウム	日本応用糖質学会北海道支部	H29. 2. 1	でん粉原料用馬鈴しょの新品種育成と最近の栽培技術	大波正寿
高品質てん菜づくり講習会	一般財団法人北海道てん菜協会	H29. 2. 8、9	テンサイ褐斑病の薬剤を中心とした効果的防除法	池谷美奈子
地域農業技術センター連絡会議 (NATEC) 研究交流会	地域農業技術センター連絡会議	H29. 2. 13	ジャガイモシロシストセンチュウの発生と試験研究の取り組み	小野寺鶴将
北海道若手女性農業者団体 (Links) 勉強会	北海道若手女性農業者団体 (Links)	H29. 2. 20	温暖化は北海道の農作物にどう影響するかー2030年代の予測と対応方向ー	中辻敏朗
平成28年度北海道自給飼料改善協議会セミナー	北海道自給飼料改善協議会	H29. 2. 23	良質安定チモシー栽培に向けた最近の育種主体の研究成果	足利和紀
第24回馬鈴しょ栽培講習会	(公社)北海道馬鈴しょ生産安定基金協会	H29. 2. 23、24	でん粉原料用馬鈴しょ新品種「コナユタカ」の栽培特性	大波正寿
スノーマーチ栽培技術講習会	きたみらい馬鈴しょ振興会	H29. 2. 27	スノーマーチ栽培技術について	松永浩
畑作技術講習会	J A小清水町	H29. 2. 28	新しいでん粉原料用の「コナヒメ」「コナユタカ」の栽培性について	大波正寿
平成28年度良質米麦生産技術講習会 (オホーツク)	北海道米麦改良協会	H29. 3. 1	小麦の安定生産技術について	三宅俊秀
北海道有機農業技術交換発表大会	北海道有機農業研究協議会	H29. 3. 2	今年度の病害虫対策について 緑肥作物の多面的効果と活用	千石由利子 小野寺政行

3 職員研修

氏名	研修項目	場所	期間
中出秀信	車輛系建設機械運転技能講習	芽室自動車学校北見教習センター	H28. 5. 9～H28. 5. 10
中出秀信	玉掛技能講習	芽室自動車学校北見教習センター	H28. 5. 16～H28. 5. 18
檜村 優	農業機械研修 (初級)	北海道立農業大学校	H28. 5. 31～H28. 6. 3
中出秀信	〃	〃	〃
中出秀信	刈払い機安全教育	(株)北友商会	H28. 6. 11
中出秀信	伐木等業務特別教育	林業木材製造業労働災害防止協会	H28. 6. 29～H28. 6. 30
井口岳人	危険物取扱者保安講習	北海道危険物安全協会連合会	H28. 7. 27
中出秀信	新規採用職員研修	北海道総合研究プラザ	H28. 7. 30～H28. 7. 31
井口岳人	採用3年目研修	栽培水産試験場	H28. 10. 6～H28. 10. 7
足利奈奈	新任研究主任研修	北海道総合研究プラザ	H28. 11. 11～H28. 11. 12
中出秀信	クレーン運転特別教育	芽室自動車学校北見教習センター	H29. 1. 20～H29. 1. 21

氏名	研修項目	場所	期間
井口岳人	農業機械研修（中級）	北海道立農業大学校	H29. 1. 30～H29. 2. 3
檜村 優	〃	〃	〃
中出秀信	〃	〃	〃
中出秀信	ガス溶接技能講習	北海道溶接協会北見支部	H29. 2. 13～H29. 2. 14
中出秀信	アーク溶接特別教育	〃	H29. 2. 14～H29. 2. 16
中出秀信	丸鋸等取扱作業従事者教育	建設業労働災害防止協会	H29. 2. 17
井口岳人	新規職員研修（研究支援職員）	中央農業試験場	H29. 2. 28～H29. 3. 1
檜村 優	〃	〃	〃
中出秀信	〃	〃	〃
中出秀信	自由研削用砥石の取替特別教育	北見地域職業訓練センター運営協会	H29. 3. 28

4 職場研修

研修会および講習会	講師	開催日
新たな人事評価制度説明会	総務課長 山井雅之	H28. 5. 10
農作業安全に関する職場研修	場長 竹中秀行	H28. 5. 20
植物等の写真撮影技術場内研修	写真家 いがりまさし	H28. 5. 27
職員の飲酒運転防止研修会	総務課長 山井雅之	H28. 8. 22
競争的資金等不正防止研修	研究部長 島田尚典	H28. 8. 4
交通安全及び情報セキュリティ研修	北見地区安全運転管理者協会講師 総務課長 山井雅之	H28. 10. 7
海外視察報告会	研究部長 島田尚典、麦類G研究主任 来嶋正朋	H28. 10. 28
労災アンケート結果説明会	主査 立山裕之	H28. 10. 19
健康づくりセミナー	法人本部保健師 内山美和	H29. 1. 18
飲酒運転根絶研修	啓発用ビデオ上映	H29. 1. 24 ～1. 26
場長退職記念講演	場長 竹中秀行	H29. 3. 24

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期間

Ⅶ その他

1 技術体系化チーム

- (1) 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化
(4) 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立
チーム: 中辻敏朗、○唐 星児、奥山昌隆 (○は課題取りまとめ責任者)
施肥試験設置地区: 北見市常呂、美幌町、大空町女満別
関係機関: 網走農業改良普及センター (本所、美幌支所)

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム (技術普及室・研究部)

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチームとしての取組はなかった。

3 表彰・受賞

- (1) 平成28年北農賞 (第77回) (平成28年12月16日)
「大豆 「ユキホマレR」、「とよみづき」、「ユキシズカ」、「ゆきぴりか」の育成」
鈴木千賀・山崎敬之・田中義則・黒崎英樹・萩原誠司・大西志全・三好智明・山口直矢・富田謙一・土屋武彦・松川勲・白井滋久・湯本節三・白井和栄・角田征仁
- (2) 平成28年北農賞 (第77回) (平成28年12月16日)
論文: 混播草地における夏季更新の播種晩限 (北農83巻2号掲載)
奥村健治・井上聡・高田寛之・藤井弘毅・林拓・酒井治・出口健三郎
- (3) 2016年度日本育種学会賞 (平成29年3月29日)
「複合障害抵抗性と機械収穫に優れた大豆品種「ユキホマレ」とその改良品種群の育成」
北海道立総合研究機構 十勝農業試験場大豆育種グループ: 田中義則・湯本節三・黒崎英樹・山崎敬之・鈴木千賀・三好智明・白井滋久・萩原誠司・大西志全・山口直矢・富田謙一・松川勲・土屋武彦・白井和栄・角田征仁
- (4) 2016年度日本育種学会賞 (平成29年3月29日)
「低アミロース遺伝資源を利用した北海道向け良食味水稻品種の育成」
北海道向け良食味水稻品種育成グループ: 佐藤毅・安東郁男・沼尾吉則・丹野久・吉村徹・尾崎洋人・荒木均・木下雅文・品田博史・粕谷雅志・清水博之・木内均・前川利彦・平山裕治・佐々木忠雄・黒木慎・相川宗巖・菊池治己・田中一生・三浦清之・新橋登・宗形信也・田縁勝洋・菅原圭一・永野邦明・本間昭・前田博・太田早苗・今野一男・鴻坂扶美子・越智弘明・品田裕二・萩原誠司

4 行事

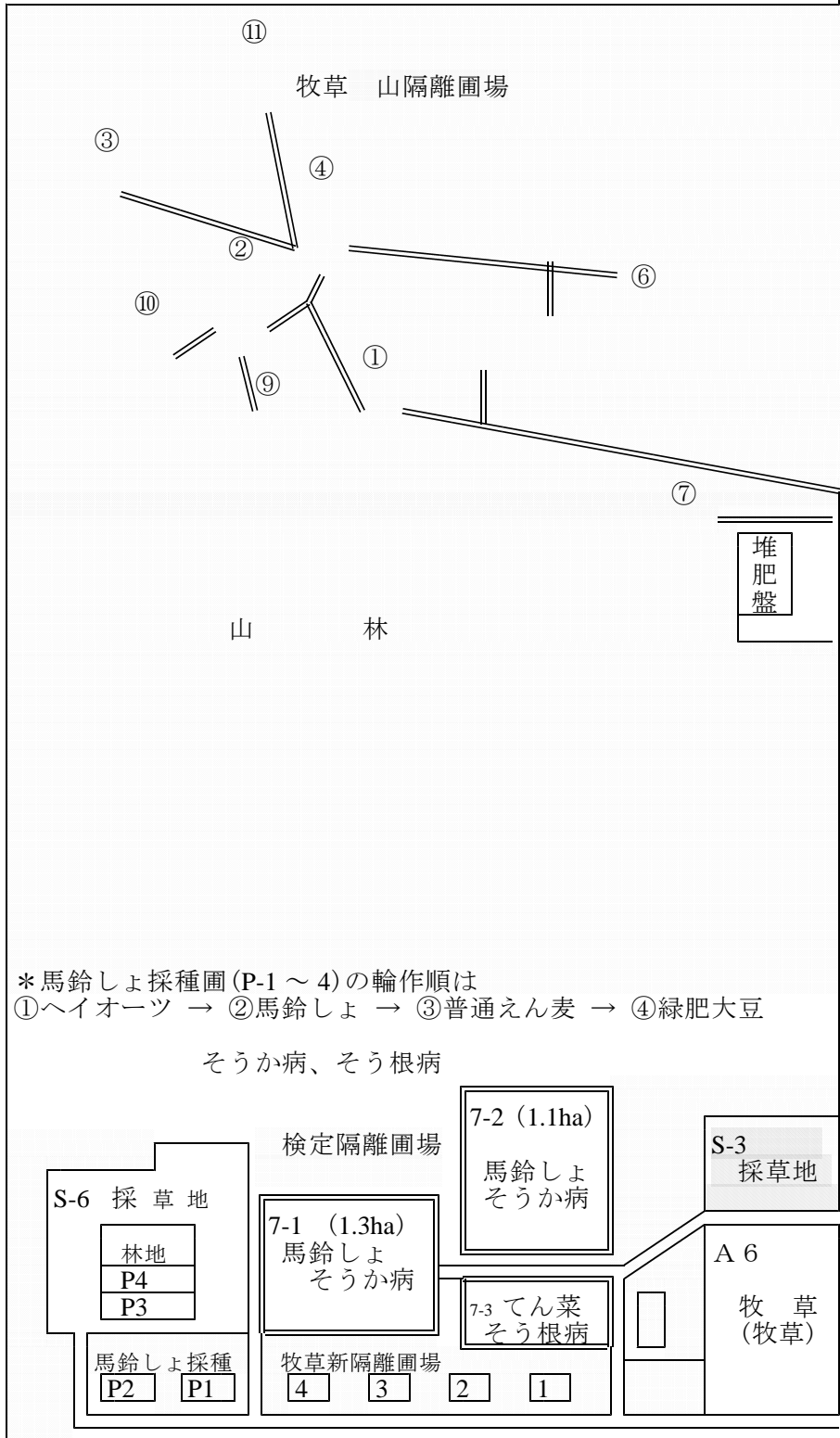
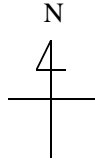
月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
4月 1日	辞令交付式（新規採用）	11月 25日	訓子府町チャレンジアッププロジェクト会議
14日	学会関係賞受賞記念講演会	12月 2日	オホーツク現地試験成績検討会
26日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	6日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会
5月 10日	新たな人事評価制度説明会	12, 15日	場内成績検討会議
11日	研究部長会議	16日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
20日	北見工業大学社会連携推進センター推進協議会	1月 16-	北海道農業試験会議成績会議
20日	職場研修(労働安全・ほ場汚染防止)	20日	
27日	職場研修(植物写真撮影)	19日	農研本部場長会議
6月 9日	農研本部場長会議	31日	訓子府町チャレンジアッププロジェクト会議
14日	見学案内リハーサル	2月 7-8日	場内設計会議
15日	オホーツクIT・ロボット農業実践セミナー	13日	NATEC総会・研究交流会
16日	オホーツク振興局施作説明会(紋別)	14日	農業新技術発表会(全道版)
27日	ほ場利用現況確認	17日	オホーツク冬のICTセミナー
28日	場内新規課題検討会議	17日	設計会議 てん菜分科会
7月 4-5日	穂発芽研究会	21日	オホーツク農業新技術セミナー
7-8日	新規課題検討会議(畜産部会)	3月 1日	労働安全衛生に関する意見交換会
12-14日	新規課題検討会議	3日	オホーツク地域農業支援会議関係者会議
20日	健康診断	3日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
8月 2日	オホーツク地域農業気象連絡協議会	6-10日	北海道農業試験会議設計会議
10日	北見農業試験場公開デー	15日	北海道農業試験研究推進会議本会議
22日	職場研修(飲酒運転防止)	17日	農研本部場長会議
31日	設計会議 秋まき小麦分科会	22日	訓子府町主催竹中場長講演会
9月 30日	農研本部場長会議	23日	オホーツク管内現地試験設計検討会
10月 12日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	24日	竹中場長退職記念講演
13日	研究開発能力向上研修(本部知財主催)	31日	辞令交付式・発令通知式(退職・異動)
21日	防火訓練・AED研修		
27日	北見工大産学官連携推進会議		
28日	海外出張報告会		
11月 11日	農研本部場長会議		
11日	遺伝資源連絡委員会		
16日	てん菜輸入品種検定試験及び育成系統連絡試験成績検討会		
17日	馬鈴しょ輸入品種選定等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会		
18日	道産小麦品質向上プロジェクト成績検討会		
22日	花・野菜部会成績事前検討会		

5 自己点検への対応

事 項	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
研究成果発表会の開催件数	1	1	1	2	0	2	1
研究成果発表会への延べ参加人数	176	234	189	247	0	496	169
研究会等の開催件数	0	2	2	4	0	0	1
研究会等への延べ参加人数	0	338	319	650	0	0	39
発表会・展示会等への出展件数	5	4	8	1	0	2	1
研究報告書の発行状況	—	—	7	6	4	4	2
技術資料の発行状況	—	—	2	1	1	1	4
学会やシンポジウム等での発表件数	18	28	39	47	24	36	33
学術誌や専門誌への投稿論文数	9	14	13	18	17	10	16
普及組織との連絡会議等開催件数	2	0	12	40	59	9	9
技術相談件数	80	58	70	88	43	66	85
技術指導件数	126	214	178	175	148	78	56
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	—	—	26	32	16	15	31
研究成果の公表・活用状況(書籍)	—	—	11	1	6	1	2
研究成果の公表・活用状況(新聞)	—	—	6	4	8	2	7
技術審査件数	1	1	1	2	1	1	1
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	8	9	0	0	0	0	0
利用者意見把握調査の回答数	0	135	116	182	48	94	180
研修会・講習会等の開催件数	0	1	0	2	14	0	2
研修会・講習会等の延べ参加者数	0	7	0	11+?	1,200	0	520
研修者の延べ受入人数	4	4	5	16	10	2	0
特許等の出願件数	1	1	2	1	0	0	1
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1	1
視察者・見学者の受入件数	40	36	45	61	33	26	37
視察者・見学者の延べ人数	776	650	668	855	512	371	603
学会等役員・委員等件数	5	7	6	11	12	14	17
国際協力事業等への協力件数	2	2	0	0	0	0	2
道関係部との連絡会議等の開催件数	1	7	29	21	25	37	28
市町村からの研究ニーズ把握件数	8	1	—	—	—	—	—
市町村との意見交換等の開催件数	2	2	4	13	3	16	5
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	5	3	6	7	6	6	3
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	3	4	0	0	0	0	0
企業等への訪問件数	17	31	44	35	20	18	22
関係団体等との意見交換等の開催件数	11	12	25	29	25	38	24

7 平成28年度ほ場配置図

H28.3.31 作成
業務委員会事務局



*馬鈴しょ採種圃(P-1～4)の輪作順は
①ヘイオーツ → ②馬鈴しょ → ③普通えん麦 → ④緑肥大豆

そうか病、そう根病



至置戸 南 8 線 (道 道) 正門 至北見

B 6-1 トクモロコシ (牧草)	B 5 緑肥そば (管理)	B 4 馬鈴薯 (馬鈴薯)	B 3 緑肥ヘイオーツ (管理)	B 2 とうもろこし (管理)	B 1 豆類 (畑園)
B6-2 草地					
B6-3 牧草 (牧草)					

A 5 混播草地 (管理)	A 4 混播草地 (管理)	D 3 秋播小麦 (麦類)	D 2 秋播小麦 (麦類)	D 1 緑肥ヘイオーツ (管理)	林地 (沢)
トールフェスク+白クローバ (H20 造成)	トールフェスク+白クローバ (H20 造成)				S-4 採草地

C 6 緑肥そば (管理)	C 5 緑肥そば (管理)	C 4 てん菜 (畑園)	C 3 緑肥大豆 (管理)	C 2 緑肥 ひまわり (管理)	C 1 緑肥 ひまわり (管理)
------------------	------------------	-----------------	------------------	---------------------	---------------------



至置戸 至北見

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 平成28年度

平成29年6月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
